

又下さると見ます。さうしてさめますと又同じ様に前にありますので、泣く泣くお返しをしました。其様にして三度お返ししますと、なほ下すつて終ひには、今度お返ししたら無禮に當るといましめられましたので、この事を知らないお寺の坊さんが、御帳をぬすんだと疑ひはしないかと思ふのも心苦しいので、まだ夜の明けない中に懐に入れて歸りました。さうしてこれをどうするのであらうと思つて擴げて見て、丁度著る著物もないのでそれではこれを著物にして着ようと思ひつきました。これを著物にして著ましてからは逢ふ者は男でも女でも皆にあはれまれて人からいろくの物をもらひました。人の訴事などにもその著物を著て、知らない場所へ行つて言はせますと屹度叶ひました。この様にしながら、人から物をもらひよいよ良人を持ち楽しく暮してゐました。それでその著物を藏つておいて、何かいよくといふ場合には取り出して著ましたが、いつも思ひ通りにかなひました。

◆則光盗人をきる事

昔、駿河前司橘季通の父に陸奥前司則光といふ人がありました。武士ではありませんが人に尊敬され、力など大へんに強うございました。世間の人望などもありました。若くて衛府の藏人でありました時、殿居所から心易い人の所へ行かうと太刀を佩いただけで小舎人童をたつた一人連れて大宮大路を下つて行きますと、御所の外垣の内に人の立つてゐる様子がしましたので、恐ろしいと思ひながら過ぎますうちに、八九日の夜はふけて、月は西山に近くなりましたので西の垣の内は蔭になつて人の立つてゐるのも見えませんのに、垣の方から聲だけして、

「あの行く人とまれ。公達がいらつしやるぞ。行くな。」と言ひましたから、矢張り居ると思つて急いで行き過ぎるのを、

「お前は行くのか。」と言つて走りかゝつて來る者がありますから見ると、弓は見えず

刀がきらりと見えましたから、弓ではないと思つて屈んで逃げますのを、追ひついて来ますから頭を割られると思つて急についと横にそれますと、追つて来た者は走り過ぎて止まらず先へ出ましたので太刀を抜いて打ちましたら、頭を真中から打ち割りましたので、うつぶしにころんでしまひました。うまくしたと思つてゐますと、

「あれはどうした。」と言つてまた一人は走りかゝつて来るので太刀もさしあへず、脇にははさんで逃げますのを、

「生意氣な奴だ。」と言つて追ひかけて来ますのが、はじめのよりは走り方が早い様なので、これは前の様にはだまされまいと思つて、急に地面に据りますと大急ぎで走つてゐたので自分にけつまづいて倒れましたのを引き違へて立ち上り起しもさせずに頭を又割りました。もうこれだけかと思つてゐますと三人ゐたのでもう一人が、

「やるまいぞ。威心な事をする奴だな。」と執念深く追ひかけて来ましたから、今度は自分切られるだらう。神様も佛様もおたすけ下さいと念じて太刀を矛の様に取つて走

りかゝる者に急に立ち向ひましたので、真正面に向き合せて突當りました。向ふも切りましたがあんまり近くに突當つたので著物も切れませんでした。矛の様に持つてゐた太刀なので突當つて腹の真中を通しましたのを、太刀の束を返しましたので仰向けに倒れましたのを斬りましたから、太刀を持つた腕を肩から切り落しました。それからかけ退いて、また人がゐるかとききました、人の足音もしないので、廻つて中御門の門から入つて柱に添つて立ち、小舎人童はどうしたかと待つてゐますと、童は大宮大路を泣きながら上つて行きますのを呼びますと、喜んでかけて来ました。それを殿居所に遣つて著替を取り寄せて著換へて、元著た著物の上著や指貫には血がついてゐるので、童にかくさせ、童の口をかたく止めて、太刀に血のついたのを洗ひなどして殿居所にそしらぬ顔をして行つてゐました。夜通し、自分がしたのだなど知られはしまいかと不安に思つてゐますうちに夜が明けて、人々が言ひ騒いでゐます。

「大宮、大炊御門の邊に大の男が三人、場所もそれほどへだてないで斬り殺してある

がひどく太刀を使つたものだ。互に斬り合つて死んだのかと見れば、同じ刀の使ひ方だ。敵がしたのか。だが盗人の様な風をしてゐる。」など言ひさわぎますのを殿上人達

が、
「さあ行つて見て来よう。」と誘ひますので行くまいと思ひますが、行かないのもまた變ですからしぶく行きました。車にあふれるほど乗つて近よせて見ますとまだどうもしてありませんで、四十ばかりでもしやくの髯の男が、無文の袴に紺の洗ひさらしの襖(袍)の兩脇の開いた著物)を著、黄色の著物のよくさらされたのを著て、猪の毛皮の鞘をした太刀を佩いて、猿の皮のたびに杵をはいて、手真似をしたりあちこち向いたりして物を言つてゐます。何者かと見てゐますと、下男が来て、

「あの男が盗人に逢つて殺したのだと申します。」と言ひましたので、嬉しい事を言ふ男だと思つてゐますと、車の前に乗つた殿上人が、

「あの男を呼べ、悉しくさかう。」と言へば、下男が走り寄つて連れて來ました。見れ

ば髯もして顔がなく鼻が低く赤鬚の男で眼が血走つて片膝をついて太刀の束に手をかけて居ます。

「どうした事だ。」ときけば、

「夜中に他所へ行かうとこゝを通り過ぎますと、お前は行くのかと言つて三人かけて來ますのを盗人だらうと思つて渡り合つて斬り伏せましたのです。今朝見れば某を打りたいと思つてゐる者達でしたので、敵であつたと思つてあの頭を切つたのでございます。」と起つたり居たり指さしたりして話してゐますので、人々が、

「さうして、さうして。」と言つてさゝますと、狂ふ様にして話してゐます。則光はやつとその時になつて自分のした事を人にゆづつて顔が上げられました。様子が目立ちはしないかと人知れず思ひましたが、自分だと言ふ者が出て來ましたのでそれにゆづつて事なくすんだと、年を取つてから子供達に話しました。

◆空入水した僧の事

これも今は昔、ある聖が桂川に身を投げると言つてまづ祇陀林寺で百日の間懺悔の法を書いた書を誦しましたので、遠い者も近い者も道も歩けないほど澤山をがみに行きます。女車などとだえるひまもありません。

見れば三十ばかりの坊さんの瘦せたのが、目を人にも見合せず、ねむつてゐて時々阿彌陀佛を言ひます。その間は唇ばかり動かすのはお念佛をいふのだらうと見えます。又時々息を吐くやうにして、集まつた者の顔を見渡しますので、その目に見合せようと、集まつた者が、こつちへ押し合ひあつちへ押し合つてひしめき合ひます。さうして其日には朝早く堂へ入つて、先に入つた坊さん達が、大勢歩いて續きます。その後、下等な者の乗る車にこの坊さんは紙の衣と袈裟などを著て乗りました。何と言つてゐるのか唇が動きません。人に目も見合せず、時々大息を吐きます。途中に立ち

並んだ見物の者どもがお洗米を轍の降る様に投げます。道々この坊さんは、

「こんな目鼻に入つては苦しい。志があるなら紙の袋に入れて自分の居た所へおくれ。」と時々言ひます。これを何も知らない者は手を合せてをがみますが少し物を知つてゐる者は、

「何故この聖はかう言ふのか。今水に入らうといふのに祇陀林寺へやれ、目鼻に入つて苦しいなどいふのはをかしい。などと言ふものもあります。さうして行つて、七條のはしに出ますと京よりもなほ、入水する聖をがまうと、人が河原の石よりも澤山に集まりました。河端へ車を寄せて止めますと、聖が、

「今は何時か。」と言ひます。供の坊さんが、
「午後四時すぎでございます。」と言ひます。

「それでは往生の時刻はまだだ。もう少し待て。」と言ひます。遠くから来た者は待ちかねて歸りなどして河原は人少なくなりました。これを見届けようと思つた者はなほ

立つてゐます。その中に坊さんがゐまして、

「往生には刻限などきめるものか。をかしのことだ。」と言ひます。かれこれ言つてゐる中にこの聖は裸になつて、西に向つて、ざぶりと河に入りましたが、舟端の繩に足を掛けて、づつぶりともはひらず押し合つてゐるので弟子の聖がはづしますと逆様になつてぶく／＼としますのを、川へ下りてよく見ようと立つてゐた男がこの聖の手を取つて引き上げましたので、両手で顔の水をはらひ、飲んだ水をはき出してこの引き上げた男に向つて手を合せて、

「大へんな御恩になりました。この御恩は極樂で御禮を致します。」と言つて陸へかけのぼりますのを、そこらに集まつた人々、子供など河原の石を取つてとりまく様にし、て投げます。はだかの坊さんが河原を下の方へ走るのを集まつた者が順々に投げましたので、頭を割られました。

この坊さんでしたか、大和から瓜を人に送つた手紙の上書に、さきの入水の上人と

書いたとかいふ事です。

◆日藏上人吉野山で鬼に逢ふ事

昔、吉野山の日藏上人が吉野の奥で行ひをしてゐますと、身の長七尺ばかりで色は紺青色をし、髪は火の様に赤く、頸は細くて肋骨があらはに出て、腹はふくれ足は細い鬼がゐて、この上人に逢ひますと大へんに泣きます。

「こりやどうした鬼か。」ときけば、この鬼が涙にむせびながら言ひますには、

「私は四五百年昔の人でございましたが、人に恨みを残してこんな鬼になりました。た。さうしてその敵を思ひ通りに取り殺しました。その子、孫、曾孫、玄孫までも残らず取り殺してしまひ今は殺す者がなくなりました。それで彼等が生れ代つたところまで知つて取り殺さうと思ひますが、それからの生れ所を少しも知りませんので取り殺しやうありません。怒りの心は同じ様に燃えてゐますが、敵の子孫は絶えはてまし

た。自分一人限りない怒りに燃えて仕方ない苦しみを受けます。こんな心を起しませんでした。極楽にも天にも生れたてごさいませう。恨みを残してこんな身になつて限り知らぬ苦しみを受けようとする事が何とも言はれず悲しうございます。人のために恨みを残すのはさながら自分のためてございました。敵の子孫はつきました。私の命は、はてしがいせん。前にこの様に知りましたらこんな恨みは残しませんでしたらう。」と云ひつけて涙を流して泣き入ります。そのうちに頭から火焰が燃え出しました。さうして山の奥の方へ歩いて入りました。それで日藏上人はあはれに思つて其ためにいろく罪の滅びる様なことをしたさうです。

◆出家の功德

これも昔、筑紫にたうさかのさへといふ齋の神(道祖の神の事)がありました。その

ほこらに、修行して歩く坊さんが泊りましたところ其晩、夜中と思ふ頃に馬の足音が澤山にして人が行くのだときいてゐますと、

「齋はいらつしやるか。」ときくこゑがします。この泊つた坊さんが不思議に思つてゐますと、このほこらの中から、

「居ります。」と答へます。又あされてきいてゐると、

「明日武藏寺にお出でになりますか。」ときくので、

「いゝえまわりません。何かあるのです。」と答へます。

「明日武藏寺に新佛がお出でになるといふので、梵天、帝釋、諸天王、龍神などがあ集まりになるのを御存じありませんか。」と言ひますと、

「さういふこともうかゞひませんでした。よくお知らせ下すつた。どうして参られずには居られませう。屹度参ります。」と言へば、

「それでは明日朝の十時頃の事です。屹度も出で下さい。お待ち申しませう。」と言つ

て行きました。

この坊さんはこれをきいて、めづらしい事をきいたものだ。明日は他へ行かうと思つたけれども、この事を見たらどこへも行かうと思つて、夜の明けるのを待ちかねて武藏寺に行つて見ましたが、そんな様子もありません。いつもよりはかへつて静かて人も見ません。どうかならうと思つて、本堂の前に居て、十時を待つてゐますと、やがてお晝にならうとしますので、どうした事かと思つてゐますうちに、年七十七ばかりのお爺さんの頭もはげて白髪がところ／＼ある頭に袋の烏帽子をかぶつて小さくなつて腰のまがつたのが杖をつきつき歩いて來ます。その後には尼がゐます。小さな黒い桶に何か入れて提げてゐます。御堂の前に來て、男は佛様の前で二三度額づいて木槩子の數珠の大きくて長いのを揉んでゐますと尼はその持つてゐる小桶を男の傍へ置いて、

「坊さんをおよび申さう。」と言つて去りました。

少したつと六十ばかりの坊さんが來て、佛様ををがんでから、

「何御用でお呼びになりますか。」とさけば、

「まう今日明日も知れない身でございますからこの白髪の少し残りましたのをそつて、お弟子にならうと思ひますのでございます。」と言へば、坊さんは目を拭ひながら、

「非常にありがたいことです。それならば早く。」と言つて、小桶の中は湯でしたが、その湯で頭を洗つて剃り、戒をさづけましたので、又佛様ををがんで、立ち歸りました。

其後また變つた事ありません。このお爺さんの坊さんになるのを喜んで、諸天も集まり、新佛が來るといふのでありました。出家をするのは身分に應じてよい事だとは今にはじまつた事ではありませんが、年を取つてからなつてさへ、かうなのですからまして若い盛の人がよく菩提心を起して身分相應にしますものの、御功德のある事は、これはいよくおしはかられます。

◆慈惠僧正受戒の日を延ばす事

慈惠僧正良源が座主(天台宗の管長)の時、受戒をする日にいつもの様に仕度をして座主の出るのを待つてゐますと、途中から急に歸りましたので、供の人々はどうした事かと思議に思ひました。大勢の坊さんや役人達も、

「これほどの大切な事の日がさまつてゐるのを今になつて大した障もないのに延ばされるのは不可ない。」と非常にそしりました。方々の國の坊さん達まですつかり集まつて受戒をするのだと思つてゐた所へ、使が来て、

「今日の受戒は延ばす事になつた。此次の時になさるのだ。」と言ひましたので、

「何如しておやめになるのですか。」ときけば使は、

「全く譯は知りません。たゞ早く行つてこの事を言へとだけおつしやつた。」と言ひます。集まつた人々は皆不思議に思つて立ち歸りました。その中に午後の二時頃になつ

て大風が吹いて南門が急に倒れました。その時人々は、この事を前に知つて延ばされたのだと思ひ合せました。受戒を行つたら幾らかの人が死んだであらうと皆感じ合ひました。

◆空也上人の臂を觀音院僧正が祈り直す事

昔、空也上人が用がありましたして一條大臣の所へ行つて藏人所にゐました。そこへ又餘慶僧正が來合せました。話をしてゐる中に、僧正が、

「その臂はどうしてお折りになつたのですか。」と言ふと、上人が、

「私の母が腹を立てて私の小さい時片手を取つて投げました時に折つたと申す事です。すが小さい時の事です。から覺えません。いゝ具合に左でしたが、右手を折つたら困つたてせう。」と言ひます。僧正が、

「あなたは貴い上人でいらつしやる。人は天皇の御子だと申しますが大變に難有い事

空也上人の臂を觀音院僧正が祈り直す事

です。御臂を祈り直しましては如何です。」と言へば、上人が、

「それはうれしい事でごさる。まことに尊い事でありませう。此お祈りを願ひます。」
と言つて近寄れば、御殿の中の人々が集まつてこれを見ます。その時僧上は頭から煙
を出して熱心に祈りますと暫らくして曲つた臂がはたと延びまして右の臂の様になり
ました。上人は涙を流して三度お辭儀をしました。見る人も皆ほめそやして感心し中
には泣く者もありました。其日上人は供に三人の若い坊さんを連れしました。一人は市
中に落ちてゐる古い繩を拾ひ集めて、壁土にまぜて古いお堂の破れた壁を塗る事をし
ます。一人は瓜の皮を拾ひ集めて水で洗ひ獄にゐる囚人にやります。一人は反古紙の
落ちてゐるのを拾ひ集めて紙にすきなほしてお經を書き寫します。その反古の坊さ
んを臂のなほつたお禮に僧正におくりましたので喜んで弟子にして義觀となづけまし
た。有難い事です。

◆聖寶僧正大路を渡る事

昔東大寺に上座(役の名)の坊さんの大へんに富裕なのがありました。少しも人に物
を遣るといふ事をせず、強慾に罪が深く見えましたので、その時聖寶僧正が若い坊さ
んでしたがこの上座の慾の深いのがあさましいと言つて、わざと争ひをしました。

「御坊。何を致したら皆に供養をなさる。」と言ひましたので、上座が思ひますには、物
争ひをして若し負けて供養をするのもつまらない。然し皆の中でかう言ふのを何とも
答へないのも口惜しいと思つて、聖寶の出来さうもない事を考へていひますには、
「加茂祭の日に真裸で禪だけをして、干鯉を刀にさして、瘦せた女牛に乗つて一條
大路を大宮通りから河原まで、『自分は東大寺の聖寶である。』と高く名のつていらつし
やい。さうしたらこのお寺の坊さん達から下部にまで大御馳走をさせう。」と言ひま
す。心中にはさうしてもよもやしまいとも思ひましたのでかたく約束をしました。聖

寶は坊さん達を皆呼び集めて、大佛様の前でお証たいて佛様に申して去りました。さて其日が近くなつて坊さん達は聖寶の渡るのを見ようと、一條富小路に棧敷を造つて皆集まりました。上座もその中にゐました。暫らくすると大路の見物人が非常にどよめきます。何事かと首をつき出して西の方を見ますと、牝牛に乗つた裸體の坊さんが、干鯉を刀にさして牛の尻をびしくと打ちながら、牛の後に大勢の童達がついて、「東大寺の聖寶が上座と賭をして通るのだ。」と大聲に言ひました。その年のお祭にはこれが一番の見物でありました。さて坊さん達は銘々お寺へ歸つて上座に大供養をさせました。この事を天子様があきになつて、

「聖寶は自分の身をすて、人を導くものだ。今の世の中にどうしてこんな貴い心の人があつたらう。」とおつしやつて召し出して僧正にまておすゝめになりました。醍醐山の上のお寺はこの僧正が建てたのです。

◆高忠の侍が歌をよむ事

今は昔高忠と言ふ越前守の許に大變に不幸な侍が居て、いつも忠實に働きますが冬でもかたびらをきてゐました。雪が非常に降る日に、

「面白く降る雪だな。侍一つ歌をよめ。」といへば、この侍が、

「何を題に致しませうか。」と言ひますと、

「はだかの事をよめ。」と言ふので、間もなくふるへ聲で言ひ出しました。

はだかなる我が身にかゝる白雪はうちらはらへども消えせざりけり

とよみましたので越前守が大そうほめて、著てゐた著物を脱いでやりました。北方もあはれがつて薄色の大へんに香のいゝ著物をやりましたので、二つとももらつてたゝんで脇にはさんで立ち去りました。部屋へ行きますとそこにゐた侍達が見て驚き不思議がつてきゝまして、かうと知りあきれてゐました。

さてこの侍はその後姿が見えませんでしたのでどうしたのかと越前守がたづねさせましたら、北山に貴い聖がありました。そこへ行つてこのもらつた著物を二つともやつて言ひましたには、

「年が過ぎて老人になりました。私の不幸は年々にひどくなります。此世の事は致し方の無い身と思はれます。後生だけはどうかして思ひまして法師にならうと思ひましたが、戒の師にさしあげる物がございませんので今までかうして居りましたら、かうして思ひがけない物をいたゞきましたので大へんに嬉しく思ひましてこれをお布施にさし上げますのです。」と言つて、

「法師になすつて下さいまし。」と涙にむせびながら言ひましたので聖は非常に貴がつ坊さんにしました。さうしてそこから行方もなくなりまして居所も分らなくなつたさうです。

◆東人の歌の事

昔、東人の大そう歌の好きなのが螢を見て、

あなてるや蟲のしや尻に火のつきてこ人玉とも見えわたるかな

これは東人のやうによまうと言つて、本當は歌の上手な貫之がよんだのださうです。

◆河原院に融公の靈が住む事

河原院は融の左大臣（嵯峨天皇の皇子）の家です。陸奥の鹽竈の景色をうつして造り、潮水を汲みよせて鹽をやかせたりいろく面白い事ばかりをして住んでゐました。大臣が亡くなつてから、宇多天皇に奉りましたので、醍醐天皇は度々御出でになりました。まだ宇多天皇のお住みになりました時、夜中頃に西の對の塗籠（四方を土で塗つた所）をあけてそゝと音をたてて人が来るやうにお思ひになりましたので御ら

んになると日の装束(東帯姿の事)を立派にした人が太刀を佩き笏を取つて二間ばかり退いてかしまつてゐました。

「あれは誰か。」とおきよになれば、

「この主の老人でございます。」と申します。

「融の大臣か。」とおきよになると、

「さやうでございます。」と申します。

「何用か。」とおつしやると、

「私の家でございますから住んで居りますのに、お出でになりますのがもつたいなくて氣兼ねが致されます。如何致しませう。」と申しますので、

「それは非常な間違だ。大臣の子孫が自分にくれたから住むのである。自分が無理に取つてゐたらばさうも言へ。禮儀も知らずにどうしてかう恨むのか。」と高くおつしやいましたらかきけすやうに消えました。その時居た人々が、

「流石に天子様は普通の者とはお異ひになる。たゞの人はその大臣に逢つて其様にきびしく言はれるであらうか。」と言ひました。

◆八歳の童が孔子と問答をした事

昔、支那の孔子が道を行きますと、八つほどの童に逢ひました。童が孔子にきき、

「日の入る所と洛陽とどちらが遠うございますか。」と。孔子が答へますやう、

「日の入る所は遠い。洛陽は近い。」童の言ひますには、

「日の入る所は見えます。洛陽はまだ見ません。それですから日の入る所は近うございます。洛陽は遠いと思ひます。」と言ひましたので、孔子が利口な子だと感心されました。孔子にはこの様に物をとひかける人もないのかうさいたのは、普通の者ではないのだと人が言ひました。

◆鄭大尉の事

昔、親孝行の者がありました。朝夕に木を切つては親を養ふ孝行の心が天に知られました。梶もない舟に乗つて向うの島へ行きますのに、朝には南の風が吹いて北の島に吹きつけます。夕方には又舟に木を樵つて入れますと北の風が吹いて家に吹きつけます。そのやうにしてゐます中に幾年か過ぎて朝廷でこれをきかれ、大臣に召し出されました。其人の名を鄭大尉と言ひました。

◆宗行の家來が虎を射る事

昔、壹岐守宗行がつまらない事で家來を殺さうとしましたので小舟に乗つて新羅國へ逃げ渡つてかくれてゐますと、新羅のさんかいといふ所で大へん人ががやく騒いでゐます。

「何ですか。」ときくと、

「虎が都にはいつて人を喰ふのです。」と言ひます。

「虎はいく匹ばかりゐますか。」

「たつた一匹ですが急に出て来て人を食つては逃げて行くのです。」といふのをきいてこの男が、

「その虎に逢つて一本矢を射つて死なう。虎が強ければ共死をしよう。たじやみくとは食はれない。この國の人は弱いのであらう。」と言ひましたのを人がきいて國守に、

「この日本の人がから申します。」と言ひましたので、

「偉い事だ。呼べ。」と言へば、人が来て、

「お召しなる。」と言ひましたので行きました。

「本當か、この人を食ふ虎をたやすく射るといふのは。」ときかれたので、

「其様に申しました。」と答へました。

「どうしてこんなことをいふのか。」

「この國の人は自分の身を安全にして敵を害はうと思ふので生ぬるく、こんな強い獸などには自分の身が傷つけられるので立ち向はないのでございませう。日本の人は自分の身を捨てゝかゝるのでよいこととございませう。弓矢を持つ者が自分の身を思ふ必要がございませうか。」

「それで虎を屹度射殺すか。」

「自分の身の生死は分りませんが虎は屹度殺しませう。」

「大へんに偉い事だ。それなら必ず用意をして射る。大それた禮をしよう。」

「それにしてもどこに居りますか。どんな風にして人を食ふのでございませう。」

「いつか知らないが都にはひつて来て人の頭を喰へて肩にかけてゆくのだ。」

「さうしてどういふ風に喰ひますか。」

「人の話では、虎が人を喰ふ時には猫が鼠をうかゞふやうに平たくなつて少したつと

大口をあけて飛びかゝつて頭を喰つて肩にかけてかけ去るのだ。」

「とにかくまあ一度射つてから喰はれませう。その虎の居所を教へて下れ。」

「これから西に三十四町はなれて麻の畠がある、その中にゐるのである。人は恐がつてその傍へは行かない。」

「私は知りませんがたゞそつちをさしてまゐりませう。」と言つて道具を背負つて行きました。

新羅の人達は日本の人はつまらない。虎にくはれるだらうと言つて集まつて悪口を言ひました。この男は虎の居所をきいて行つてみますとほんたうに麻の畠がひろくとあります。麻の丈は四五尺ばかりです。その中を分けて行つてみますと本當に虎がねてゐました。矢を番へて片膝を立てゝゐますと虎は人の香をかいて平になつて猫が鼠をうかゞふやうにするのを、男は矢を番へたまゝじつとしてゐますと、虎は大口をあいて男の上をどりかゝつて來ましたところを男は弓を強くひいて上にかゝる時に矢

を放しましたので顎の下から首に七八寸ばかりも矢を射出しました。虎がさかさまにひつくりかへつて足掻くのをもた二度腹を射ました。二度とも土に射通して到頭殺して矢も抜かずに都へ歸つて守にかうくして射殺したと言ひましたので守も感心して大勢の人を連れて虎の所へ行つて見ますと本當に矢は皆射通されてあります。見ますのに何とも言はれません。百千の虎がかゝつて来ても日本人が十人も馬で立ち向つて射つたら虎も仕方がないでせう。此國の人は一尺ばかりの矢に錐の様な矢じりをつけてそれに毒を塗つて射るので終ひにはその毒の爲に死にますがその場に直ぐに射殺することは出来ません。日本の人は自分の命の死ぬのも惜まず大きな矢で射るのでその場で射殺しました。武の道は日本人にはかなはない。それだからなほく恐ろしく思はれる國だと恐れました。

それからこの男をなほ惜んでいたはりましたが、妻や子の事を思つて筑紫に歸り、宗行の所へ行つてその事を話しましたので日本の面目を上げた者だと言つて勘當も赦

しました。新羅から澤山の物をもらひましたのを宗行にもやりました。多くの商人達も新羅の人の話すのをきつたへて語りましたので、筑紫でもこの國の人の兵士は強いものにしたといふことです。

◆遣唐使の子が虎に食はれる事

昔、遣唐使として支那へ行つた人が、十ばかりの子を手ばなしがたく思つて連れて行きました。さうして居ますうちに雪の大へんに多く降つた日に外へも行かずにおますと、この子は遊びに出て行きましたが遅くまで歸りませんので不思議に思つて外へ出て見ますと、足跡のついてゐる傍に大きな犬の足跡があつてそれからこの子の足跡が見えませんが、犬の足跡は山の方へ行つてゐるのを見てこれは虎が食つて行つたのだらうと思ひ悲しくてたまらず、太刀を抜いて足跡について山の方へ行つてみますと、岩屋の口に虎がこの子を食ひ殺して腹を嘗めてゐます。太刀を持つて走り寄りますと逃

げもせずにかまつてゐますのを、太刀で頭をうてば鯉の頭を割るやうに割れました。次にまた食ひつかうと走り寄る背中を打つて背骨を切りぐたくくにしてしまひました。それで子供は死んでしまひましたがその虎をかへて家に歸りましたので其國の人達が見て大へんに恐れおどろきました。支那の人は虎に逢へば逃げる事さへあぶないのにこの様に虎を殺して子の仇を取つて來ましたので支那の人は非常な事だと言つて日本の國は武力に於いては並ぶもののない國だとほめました。子が死んでしまつては何の甲斐もありません。

◆或上達部中將の時召人に逢ふ事

昔、ある上達部(三位以上の人)がまだ中將でありました時、參内の途中で坊さんをつかまへて連れてゆくのに逢ひまして、
「この坊主は何だ。」ときかせますと、

「年頃仕へてゐた主人を殺した者でございます。」と言ひましたので、

「實に罪の深い事をしたものだ。ひどい事だ。」と何氣なく言つて過ぎましたらこの坊さんは血走つた、憎々しい眼で睨み上げましたので、つまらない事を言つてしまつたものだと言味悪く思つて行きますと、又男を縛つて行きますので、

「これは何をしたのか。」と懲りもせずにかまますと、

「人の家に逃げ込んで男は逃げて行つたのでこれをつかまへてゆくのです。」と言ひましたので、格別悪くもない者だと思つて、縛つて行く人を知つてゐましたので頼んでゆるしてやりました。かういふ氣で、人の可哀さうな目に逢つてゐるのを見ては助けやる人で、初めの坊さんも悪くないのなら頼んでゆるしてやらうと思つてきましましたら、思ひの外に重い罪なのでさう言ひましたのを坊さんの方では腹に据ゑかねました。さてほどなく大赦があらまして、坊さんも赦されました。

ある月のよい晩に人は皆家に歸つたりねしづまつたりしましたのをこの中將は月を

賞してたゞずんでゐますと、何か塀を越えて下りたと見るうちに後から抱きしめるやうにして飛ぶやうに出ました。あきれあわてて何とも考もつかないうちに恐ろしさうな人々が集まつて険しい山の恐ろしい所へ連れて行き、柴をあんだやうなものを高く造つた上において、

「生意氣な事をいふ者はかうする。何でもない事を重く言つて非道い目に逢はせたからその返禮にあぶり殺すのだ。」と言つて火を山のやうに燃しましたので夢でも見るやうで、まだ若くて弱くはあり夢中でゐました。熱さは熱し今にも死にさうに思つてゐますと山の上から大きな鎗矢を射出しましたので其處にゐる者達はこれはどうしたのかと騒ぐ中に雨の降るやうに射ますので暫らくこつちからも射ましたが向ふは人数が多くて叶はないのか火の事も捨てて射ちらされて逃げてゆきました。其時一人の男が出て来て、

「どんなに恐ろしくお思ひになりましたでせう。私はいつぞや縛られてまゐりました

のをお蔭様で助けていたゞ嬉しく、いつかこの御恩返しをしようと思つて居りましたところ、坊主のことはわるくおつしやつたといふので日夜隙をうかゞつてゐるのを知りましたから御知らせしようと思ひながら、私がかうしてお護りしてゐるからと思つて居りますうちに、一寸はなれました隙にかうしてお連れ申して塀を越えて出たのにお逢ひ申しましたが其處でお取返ししては殿様も御怪我をなさるかも知れないと思ひこゝて射拂つてお取返し申したのです。」と云つて、それから馬に乗せてたしかに元の所へ送りましたので白々と夜の明ける頃に歸りました。年をとつてから、
「こんな目に逢つた。」と人に話しましたのです。これは四條大納言(藤原公任)の事だといふのは實際の事でせうか。

◆陽成院の妖怪の事

陽成院が御讓位あそばされてからの御所は、大宮よりは北、西洞院よりは西、油小

陽成院の妖怪の事

路からは東てありました。大きな池がありましてその釣殿(池の上に建てた家)に番人がねてゐますと夜中頃に細い手が此男の顔をそつとなてました。うるさいと思つて太刀を抜き、片手でつかみますと、淺黄の著物を著た翁も思ひの外にあはれつぽいのが、「私は昔住んでゐた池の主で浦島の弟でございます。昔からこゝに住んで千二百餘年になります。どうぞおゆるし下さい。こゝに社をたててまつつて下すつたらお守り致しますせう。」と言ひましたのを、

「自分の一存では出来ない。この事を院に申し上げた上で。」と言ひましたので、憎い男の言種だと言つて三度上へ蹴上げてぐたくにして落ちてくる所を口をあいて食つてしまひました。普通の人位な男だと思つてゐると見るまに大そう大きくなつてこの男を一口に食つてしまひました。

◆水無瀬殿のむさゝびの事

後鳥羽院の御時に水無瀬殿(水無瀬といふ所の離宮)に毎夜山からからかさぼどの物が光つてお堂へ飛び入りました。番をする人達が銘々にこれを見現はして高名をたてようと氣をつけて用心をしましたが何とも出来ずにゐますと或夜、景かたといふ人がたつた一人て中島にねて待つてゐますと例の光物が山から池の上を飛んで行きましたので起きるのもあぶないと思ひ、仰向にねながら弓をよくひいて射ましたら手筈があつて池へ落ちるものがありました。それから人々に知らせて火をつけて皆見ましたら非常に大きなむさゝびの年をとつて毛などもはげ強さうなのでありました。

◆上緒の主が金を得る事

昔兵衛佐の人がありました。冠の上緒(冠の勝て結んだ紐のあまりを上へ上げてとめるのをいふ)が長かつたので世間の人が、あげをのぬしと字名をつけました。或時西八條と京極との鳥の中を行きますと急に夕立がしましたのでそこにあつた小

上緒の主が金を得る事

な家に馬から下りて入りました。見れば一人の女がゐます。馬を引き入れて、夕立を待つ間、そこにある、平な小唐櫃の様な形の石に腰をかけてゐました。さうして手まざぐりに小石をとつてこの石をたいてゐましたが、打たれて窪んだ所を見ると金色をしてゐます。珍らしい事だと思つて剝げた所を塗つてかくし、女にきゝました。

「この石は何の石ですか。」

「何の石でございませうか、昔からさうしてあるのでございませう。こゝは昔長者の家がございましてので、この家は倉のあとにあるのでございませう。」

見れば本當に大きな土臺石があります。

「さうしてそのお腰をかけていらつしやる石はその倉の跡を畑に作らうと畝を堀る中に土の中から堀り出されたのです。それがかうして家の中にございませうのでどけようと思ひますが女の力ではどけやうもございせんので邪魔にしなからうかうして置いてあるのでございませう。」と言ひましたので、自分がこの石をもらはう。後で目の

利く人を見付けはしないかと思つて女に、

「この石は私がもらひませうよ。」と言ひますと、

「よろしうございませう。」といひましたので、その邊の知つてゐる男の空車を借りやつて積んで出る時、たゞもらふのもひどいと思つて綿入を脱いでこの女にやりました。女は意外に思つて喜びさわぎました。

「この石は女達はつまらない物と思つても自分には家に持つて行つて遣ひ道があるのです。ですからたゞもらふのもと思つてこの著物をあげるのです。」といへば、

「思ひもかけない事でございませう。不用の石の代りに大そうな上等のお召の綿の厚いのをいたゞかうとは冥利が恐ろしい。」と言つて竿にかけてをかんてゐました。こちらは車に乗せて家に歸り、はしから缺いては賣つて物を買ふので、米や錢や絹や綾などいろ／＼な物に代へられて大へんな富裕な人になりましたので、西の四條よりは北、皇嘉門よりは西に人も住まない沼地のぶく／＼した所が一町ばかりあります。もとの

人もほんの少しの代で買ひました。持主は不用の沼なので畠にも作られまいし家もたてられまい。無駄な所だと思つてゐますのに、安い代にしる買はうといふ人があるのを物好きな人だと思つて賣りました。

上緒のぬしはこの沼地を買つてから攝津の國へ行き舟を四五艘連れて難波のあたりへ行きました。さうしてお酒やお粥を澤山用意し、また鎌を澤山求めました。それから通る人と呼ば集めて、

「この酒も粥も召し上げ。その代りにこの葦を少しづつ刈つて下さい。」と言ひましたので喜んで集まり、四五束、十束、二十束と刈つてくれます。そのやうにして三四日刈らせましたので山の様に刈りました。それを十艘ばかりの舟につんで京へ上りますのに、お酒を澤山用意しましてその人々に、

「たゞ行かずにこの綱をひけ。」と言ひましたので、このお酒をのみながら引舟の綱を引いて大へん早く加茂川尻につけました。それから車力に物をやつてこの葦を沼地に

入れ男達を雇つてその上に土をかけて、家を思ふまゝに作りました。南の方は大納言源定(嵯峨天皇の皇子で融の兄)と言ひました人の家で、北はこの上緒の主が埋めて作った家です。それをこの定の大納言が買ひとつて二町にしました。それが此頃の西の宮です。かういふ女の家にあつた金の石をもらつてそれを本にして作った家です。



元輔の落馬の事

昔歌よみの元輔が内藏助になりまして加茂祭のお使になりまして一條大路を行きます時、殿上人が車を澤山並べて見物してゐる前に行くのに普通には行かず、人が見てゐるからと思つて馬を駆かせましたので馬が荒れて落ちてしまひました。年をとつてゐるのに真逆様に落ちましたので、公達があなやと見ますと素早く起きましたので冠が脱げました。毛が少しもなくしてお盆をかぶつたやうでありました。馬丁があわて、冠を取つてかぶせますが後へおしやつて、

「うるさいな。少し待て。公達に申し上げる事がある。」と殿上人の車の前に歩いて行きます。日がさしてゐるのに頭がきら／＼光つて大へんをかしようございますので大路の者が市の様に集まつて笑ひのしりませす。車や棧敷にゐる人々も笑ふので、一つの車の方によつていひますには、

「公達、馬から落ちて冠を落したのを馬鹿だと思し召すか。さうは思し召すまい。その譯は氣をつけてゐる人でも物につまづいて倒れるのは例のこととござる。まして馬は人間ではござらぬ。この大路は非常に石が出て居ります。馬は手綱で口を引張りましたから歩かうと思つても歩かれせん。あちこち引けば倒れかゝります。馬が悪いのではござらぬ。唐鞍は皿のやうな鍔で足がかけられせん。それに馬がひどくつまづきましたので落ちました。それは悪い事ではござらぬ。又冠の落ちる事は結はへるものでなく髪をかき入れたのでおさへられるものでござる。それを毛が失くなりましたので落ちるのは冠を恨む事も出来せん。またかういふ例がないでもござら

ぬ。某の大臣は大嘗會の御禊の時に落ちました。某の中納言はいつかの行幸の時に落ちました。かういふ例も數へられないほどです。それ故様子も御存じない此頃の若い方々はお笑ひになる事ではござらぬ。お笑ひあらばかへつて馬鹿でござらう。」と車毎に指を折りながら數へて言ひさせます。このやうに言ひ終つて、

「冠もつて来い。」と言つて、かぶりしました。其時に皆どよめいて笑ひはやしました。冠をかぶらせようと傍へ寄つた馬丁が、

「お落ちになつて直ぐおかぶりにならないで何故こんな下らないことをおつしやるのですか。」ときゝますと、

「馬鹿いふな。かう譯を言ひきかせたらこの公達は後にも笑ふまい。さうでなければ口の悪い方々はいつまでも笑ふものを。」と言ひました。人を笑はせる事を仕事にするのでした。

◆利延が迷神にあふ事

今は昔、三條院が八幡に行幸あそばされました時、左京屬て邦の利延といふ者が供奉致しましたが、長岡の寺戸といふ所を歩きますと人々が、

「この邊には迷神がある。」と言ひながら歩きますので、

「私もそのやうにさします。」と言つて歩きますうちに、道もはかどらないで日がだん／＼暮れて行つて、もう山崎の邊へ行きつく筈ですのに不思議にも同じ長岡のあたりを過ぎて乙訓川の上を行くと思へばまた寺戸の岸をのぼつてゆきます。寺戸を過ぎて又行き、乙訓川の上に来て渡ると思へばまた桂川を渡ります。日もだん／＼暮れてゆきます。後前を見れば供の人も一人も見えなくなりました。前後にずつと續いた人も見えません。夜が更けたので寺戸の西の方の板屋の軒に下りて夜をあかして翌朝考へますには、自分は左京の役人だから九條でとまる筈なのにこゝまで来たのは理由が

ない。それに同じ所を一晚中まはり歩いたのは九條邊から迷神がついて連れて來るのを知らずにかうなつたのだらうと思つて明けてから西の京の家に歸つて來ました。これは利延が本當に話した事です。

◆龜を買つて放す事

昔天竺の人が寶を買ふために錢を五十貫子に持たせて遣しました。其子がある大きな河の岸を歩きますと舟に乗つた人があります。舟の方を見ますと舟から龜が首を出してゐます。錢を持つてゐる人が立ちどまつて、この龜を、

「何にするのですか。」ときけば、
「殺して物にするのです。」と言ひます。

「その龜を買ひませう。」と言へばこの船の人が、大へん大事なことがあつて用意をした龜だからどんな代でも賣る事は出來ないといふ事を言ひますのでなほ強ひて手を合

せて頼み、この五十貫の錢で龜を買ひ取つて放してやりました。さうして思ひますには、親が寶を買ひに隣の國へ遣した錢を龜にかへてしまつたから親はどんなに腹を立てるであらう。然し又親の所へ行かないわけにも行かないと、親の所へ歸つて行きますと、途中で逢つた人が、

「こゝで龜を賣つた人はこの下で船がひつくりかへつた。」といふのをきいて、親の家へ歸り、錢は龜にかへた事を話さうと思つてゐますと親の言ふには、

「どうしてこの錢を返してよこしたのか。」ときくので、子が、

「そんなことはありません。その錢ではかうくして龜を買つてゆるしてやりましたのでその事を申さうと参りましたのです。」といへば、親の言ふやう、

「黒い著物を著た同じやうな人が五人銘々十貫づゝ持つて來た。これがさうだ。」と見せますと、この錢はまだぬれたまゝです。買つて放してやつた龜がまうその錢が河へ落ちたのを見て拾つて子が親の所へ歸らない前に持つて來たのでした。

◆夢を買ふ人

昔備中國の郡司の子にひさのまさ人といふのがありました。若い男でした時夢を見ましたので、占はせようと夢解の女の所へ行つて夢を合せてから話をしてゐますと、大勢人ががや／＼と來ます。國守の總領の息子が來るのでした。年は十七八ばかりで心ばへは知りませんが見た所はきれいで、四五人ばかり人を連れ来ました。

「こゝが夢解の女の所か。」ときけば、供の侍が、

「こゝでございます。」と言つて來ますからまさ人は上の方の内にある部屋へ入つて穴からのぞいてみますとこの人がはひつて來て、

「かういふ夢を見たがどうだ。」と言つて話してきかせます。女はきいて、

「まことによいお夢でございます。屹度大臣にまで御出世をなさいます。全くよくござらんになりました。決して人にお話しなさいませぬ。」と言ひましたのでこの人は嬉し

さうにして著物を脱いで女にやつて歸りました。其時まき人は部屋から出て女に、「夢は取るといふ事がある。この方の御夢を私に取らせて下さい。國守は四年たてば歸つて行きますが自分はこの國の人だからいつまでも居る上に郡司の子でもあるから自分の方を大切に思ひませう。」と言へば、女が、

「あつしやる通りに致しませう。それでは今いらした方の様にしていましてそのあつしやつた夢を少しも違はずお話しなさい。」と言ひますので、まき人は喜んでその人のした通りにはひつて来て夢を話しますと女は同じやうに言ひます。まき人はうれしく思つて著物を脱いでやつて歸りました。

その後學問をしましたらずん／＼進んで才のある人になりました。朝廷できこしめして試してごらんになると本當に智恵が深いので支那へ留學をさせられ、久しく支那でいろ／＼の事を習ひ傳へて歸りましたから、天子様は偉い者に思し召してだん／＼に上げて大臣にまでなさいました。それですから夢を取る事は利口な事です。夢をと

られたあの備中守の子は位もないもので終りました。夢を取られなかつたならば大臣にもなつたてせう。ですから夢は人に話さないものだと言ひ傳へます。

◆大井光遠の妹の強力の事

今は昔甲斐國にゐました大井光遠といふ相撲は背が低くてふとり力が強くて足も早く見たところもよくてよい相撲でした。その妹に年は二十六七ばかりで、姿も様子も器量もよくて風のすらりとしたのがありました。それは別の家に住んでゐましたが、或時其家に人に追はれた男が刀を抜きながら駆け込んでこの女をつかまへて質にしておなかに刀をつきつけてゐました。それを見た人が駆け行つて兄の光遠に、

「お嬢様が質にお取られになりました。」と知らせますと光遠は、

「あの人は薩摩の氏長(有名な力士)だけは質に取るであらう。」と言つて平氣でゐましたから知らせた男は不思議に思つて立ち歸り隙からのぞきますと九月頃の事で薄色の

著物一枚に紅の袴をはいて口を覆つてゐます。男は大きな男で恐らしいのが大の刀を逆手に持つておなかにつきつけて足で後からかゝへてゐます。この女は左の手では顔をかくして泣き、右の手では前に矢竹の荒けづりをしたのが二三十ばかりあるのを取つて手ずさみに節の所を指で板敷におしあてゝにじると腐つた木のやはらかなのを碎くやうにくだけるのをこの盗人が見てあきれてしまひました。強い兄が鐵槌で打ち碎いてもからはあるまい。大變な力だ。こんなでは直ぐに自分は取りひしがれるであらう。無駄な事だから逃げようと思つて人目をうかゞつて飛び出して逃げのく所を人々がかげよつてつかまへました。さうしてしばつて光遠の所へ連れてゆきました。光遠が、

「何と思つて逃げたのか。」ときけば、

「大きな矢竹の節を朽木などのやうに押しつぶされましたのであきれて恐ろしさに逃げたのでござります。」。

と言ひますと光遠が笑つて、

「どうしても其人は突かれまい。突かうとする手を取つてねぢ上げて突いたら肩の骨は上へ出てねぢられるであらう。いゝ鹽梅にお前は腕を抜かれない運命があつて妹はねぢらなかつたのだ。光遠でもお前を手殺に殺せよう。腕をねぢつて腹や胸をふんだらお前は生きられるか。それだのにあの人の力は光遠の二人前もある力だものを。ほつそりと女らしいけれども自分が遊びに手をつかんでその腕をつかまへられれば自然に手が廣がつて放してしまふものを、もし男であつたら叶ふ者もあるまい。残念にも女である。」といふのをきいてこの盗人は死にさうに思ひました。女と思つてよい質を取つたと思つてゐましたがその甲斐はありません。

「お前を殺す筈だが、死ぬ筈なら妹が殺すであらう。お前は死ぬところをうまく逃げ出したな。大きな鹿の角を膝にあてゝ細い枯木などを折るやうにするものを。」と言つてその盗人をゆるしてやりました。

◆或唐人が娘の羊に生れたのを知らずに殺す事

昔支那に何處かの司になつて下らうとする者がありました。名をけいそくと言ひまして娘が一人ありました。大へんに可愛らしうございましたが十四でなくなりましたので両親の悲しみやうはたとへ方もありません。さうして二年ばかりたつて田舎へ下らうと親しい家の一族を集めて任地へ行く事を言はうと思ひ、市から羊を買つて皆に御馳走をしようと思はすと、その母が夢に見ますには亡くなつた娘が青い著物を著て白いされて頭をつゝんで髪に玉のかんざしを二つさして來ました。生きて居た時に少しも違はないで母に言ひますには、

「私が生きて居りました時に御両親が可愛がつて何でもさせて下さつたので親に話さずに物を遣ひ又人にもやりました。盗んだのはございせんがだまつてした罪で今羊に生れました。參つてその報いを受けようとして居ります。明日吃度頭の白い羊

になつて殺されようと致します。どうぞ私の命をおゆるし下さいまし。」と見ました。驚いて翌朝臺所を見ますと本當に青い羊で頭の白いのがあります。脚や背中が白くて頭に二つの斑があります。普通人がかんざしをさす所です。これを見て母が、

「まあ一寸この羊を殺してはいけない。殿様がお歸りなつてからうかゞつてゆるすのだ。」と言ひますと、守は他所から歸つて來て、

「どうして皆に上げる物がおそいのだ。」と小言を言ひます。

「この羊を料理してつけようと致しますと奥様が殺すな、殿様に申し上げてゆるさうとおとめになりぬすので。」など、言ひますので立腹して、

「間違をするな。」と殺さうと釣りつけますとお客達も來て見れば、可愛らしい顔立もよい十あまりの女の子の髪に繩をつけてつり下げてあります。この女の子の言ひますには、

「私はこの守の娘でございしましたが羊になつたのでございす。今日の命をあなた

或唐人が娘の羊に生れたのを知らずに殺す事

方でお助け下さい。」と言ふのでこの人々は、

「お、恐ろしい恐ろしい。決して殺すな。お話して来よう。」と行きます中に、この料理をする人には普通の羊と見えるので屹度遅いと腹を立てるだらうと思つて殺してしまひました。その羊のなく聲がこの殺す者の耳には普通の羊のなく聲に聞こえます。さて羊を殺して煎焼だのいろ／＼にしましたがお客様は物も食べないで歸りました。不思議に思つて人々にきけばかう／＼とはじめから話したので、悲しみさわぐうちに病氣になつて死にましたので田舎へも行かずに終ひました。

◆出雲寺の別當の事

昔、御所の北に上つ出雲寺といふお寺を建て、から久しく年が過ぎましてお堂も傾きよく修理をする人もありませんでした。この近くに上覺といふ別當がゐました。これは前の別當の子でした。代々續いて妻子のある坊さんが寺を支配してゐました。寺

は益々あれてゆきました。これは傳教大師が支那で天台宗をたてる所を選びました時、この寺の所を繪に書いてやりまして、高雄と比叡山とかむつ寺(出雲寺の事)と三つの中てどれがよいだらうとありましたのを、

「この寺は他よりもよいが、僧がだらしがないだらう。」と言ひましたので止めた所です。大へんによい所ですがどうしたのかかうなつて悪くなりました。或時上覺が夢に見ますには父の前の別當が大へんに年を取つて杖をついて出て来ていひますやう、
「明後日の午後二時頃に大風が吹いてこの寺が倒れる。自分はこの寺の瓦の下に三尺ばかりの鯰になつて行く所もなく水も少なくてせまく暗い所でひどく苦しい目に逢つてゐる。寺が倒れて庭にころび出て歩いたら子供達が殺さうとする。其時お前の前に行くから子供達に打たせずに賀茂川に放してくれ。さうしたらひろ／＼として澤山の水の所に行つて安心である。」と言ひます。夢がさめてから、
「こんな夢を見た。」と言へば、

「どうした事でせう。」と言つて日もくれました。その日になりますとお晝頃から急に空が曇つて大風が吹き出しました。人々はあわてゝ家などをつくろつて騒ぎますが風はますます強くなつて村の家を皆吹き倒し、野山の木や竹も倒れたり折れたりしました。この寺も本當に二時頃に吹き倒されました。柱が折れ棟がくづれて形もありません。屋根裏の板の中に年頃の雨水がたまつてゐて大きな魚が澤山ゐます。その近所の者達は桶を下げて来て皆掻き入れてさわぐ中に三尺ばかりの鯰がのた／＼と庭に這ひ出しました。さうして夢の通りに上覺の前へ来ましたの上覺は思はずも魚の大ききよいのにみとれて鐵杖の大きなのを頭につきたてゝ自分の總領息子呼んで、「そら。」と言ひましたから魚が大きくて捕へられないので草かり鎌で勝をかき切つて物に包ませて家に持つて行きました。さうして他の魚など取つて桶に入れて女に頭に乗せて運ばせて自分の坊に歸りますと妻が、「この鯰は夢に見えた魚でせう。何しにお殺しになつたのです。」と氣味を悪がりまし

たが、他の子供が殺すのも同じ事だ。自分は食べようなどい言つて、「他人を入れずに太郎次郎などが食べたなら父上も嬉しくお思ひにならう。」と、ぶつぶつと切つて煮て食べ、

「どうしたのか不思議に他の鯰より味がいい。父上の肉だからよいのだらう。この汁を飲め。」などうまがつて食べます中に、大きな骨を喉にたてゝげい／＼と言ひました。が急には出ないので苦しがつて遂々死んでしまひました。妻は恐ろしがつてそれから鯰を食べなくなつたさうです。

◆念佛の僧の魔往生

昔美濃國の伊吹山に久しく行ふ聖がありました。阿彌陀佛より外の事を知らないて、餘念なく念佛を唱へて年を過しました。或夜更けて佛様の前でお念佛を唱へてゐますと空に聲がして、

「お前はよく自分を信じてゐる。今は念佛の数が澤山積つたから明日の午後二時には
屹度迎へに来るであらう。決して念佛を怠るな。」と言ひます。それをきいてよく／＼
お念佛を唱へ水を浴び香をたき花を散らしてお弟子達にも一緒に念佛を言はせて西
に向つてゐました。その時になりますと段々ひらめくやうにするものがあります。手
を合せてお念佛を言つて見ますと佛様の體から金色の光を放つのがさし込みます。秋
の月が雲間から現れ出たやうです。いろ／＼の花を降らし白毫の光が聖の身を照らし
ます。此時聖は逆様になつてをがみ入り數珠の緒が切れさうに揉みます。觀音様が蓮
臺をさしあげて聖の前に近寄りますと紫の雲がたちこめて聖は這ひよつて蓮臺に乗
りました。さうして西の方へ去りました。お寺に残つてゐる御弟子達は涙を流して貴
がり、聖の後世をとぶらひました。さうして七八日過ぎてお寺の下の方の坊さん達が
お念佛をする坊さんにお湯をつかはせようと木を樵りに山の奥へ行きますと、遙かの
谷にさし出た杉の木があります。その木の梢に叫聲がしますので不思議に思つて見上

げますと、坊さんを裸にして梢にしぼりつけてあります。木登をよくする坊さんが登つ
て見ますと極樂へ迎へられた自分の師の聖をかづらしてしぼりつけてありますのでこの
坊さんが、

「どうしてお師匠様はこんな目にお逢ひになるのですか。」と言つて近寄つて繩をとき
ますと、「今迎へるぞ、それまで暫らくかうして居れと佛様のおつしやつたものを何
しにほどくのか。」と言ひましたが寄つてときましたので、

「阿彌陀様、私を殺す者があります。をうをう。」と叫びました。然し坊さん達が
大勢のぼつてとき下ろしてお寺へ連れてゆきますとお弟子達は大へんな事だと歎きさわぎ
ました。聖は人心地もなく二三日して死にました。智恵の無い聖はこのやうに天狗に
あざむかれたのです。

慈覺大師が纈纈城に入る事

昔慈覺大師が佛法を習はうと支那へ行つてゐますと會昌年中に唐の武宗が佛法を滅ぼし、お堂や塔を破壊し坊さんや尼さんを捕へて殺し又は還俗させる亂に逢ひました。大師をも捕へようとしたので逃げてあるお堂の中へ入りました。召捕の使はそのお堂へはひつて探しましたので大師は仕方がなくて佛様の中へはひつて不動様を念じてゐますと、使は探して佛様の中に新しい不動様が居るのを不思議に思つて抱き下ろして見ますと大師は元の姿になりました。そこで使は驚いて天子様にこの事を申し上げると天子様が、

「外國の聖だから早く追ひ放せ。」と言はれましたので放しました。大師は喜んで他の國へ逃げますと遠く山をへだて、人家がありません。塀を高く築いて一つの門がありましてそこに人が立つてゐます。喜んできくと、

「これは一人の長者の家です。あなたはどなたです。」と問ひますと答へて、

「日本から佛法を習ふために渡つた僧ですがこの様な亂に逢つて暫らくかくれてゐよ

うと思ふのです。」と言ひますと、

「こゝは中々、人が來ない所ですから暫らくこゝにいらしつて世間が静まつてからお出になつて佛法もお習ひなさい。」と言ひますので大師は喜んで内へ入りますと門を閉めて奥の方へ入りますから後について行つてみますといろ／＼な家が建ち並んでゐて人が大勢ゐて騒がしうございます。さうして大師を傍の家に置きました。大師は佛法を習ふやうな所があるかと見歩きますと佛様もお經も坊さんも何も見えません。後の方に山によつて一つの家がありますので近寄つてきくと人のうなり聲が澤山します。怪しいと思つて垣の隙から見ますと人を縛つて上から釣り下げ、下に壺を据ゑて血をたらして入れてゐます。あきれ譯をさしなくても答もしませんが非常に怪しみ又他の所をさくと同じやうに聲がします。のぞいてみますと色の大へん青い者達の瘦せ細つたのが大勢ゐてゐます。一人を呼びよせて、

「これはどうした事ですか。こんなに苦しうなのはどうしたのです。」ときけば、木

の切を持つて来て細い腕を出して土に書きますのを見ると、

「これは額城です。こゝへ来る人には一番先に口がきかれなくなる薬を食べさせ、次には肥る薬を食べさせます。それから高い所から釣り下げて所々を刺して血を出して、その血で絞を染めて賣るのです。これを知らないでこんな目に逢ふのです。食物の中に胡麻のやうで黒い物があります。それは物を言はない薬です。そのやうな物をすゝめましたら食べる真似をしてお捨てなさい。さうして人が何か言つたらたゞうめいていらつしやい。それからどうにかして逃げる用意をしてお逃げなさい。門はかたくしめるので中々逃げられません。」と悉く教へましたので、元の居場所に歸つてゐました。其内に人が食物を持つて來ました。教へられた通りに中に胡麻のやうな物がありますので食べるふりをして懐中し後で捨てました。人が來て物をさけば呻くだけで物も言ひません。もうよいと思つて今度は肥える薬をいろ／＼にして食べさせますから同じ様に食べる真似をして食べません。人の立ち去つた隙に東北の方に向つて、

「比叡山の佛様お助け下さい。」と手を合せていのりますと、大きな犬が一匹出て來て大師の袖を喰へて引きます。譯があるのだらうと思つて引く方に出ますと、思ひがけなく水門がありましてそこから引き出しました。外に出ますと犬は消えてしまひました。今はもうよいと思つて足の向いた方へ走りました。遠くに山を越えて人里があります。人が見て、

「これはどこからいらした方がこんなにかけていらつしやるのですか。」ときゝましたので、

「こんな所へ行きましたのが逃げて歸るのです。」と話しますと、

「まああされた事でしたね。それは額城です。あそこへ行つた人は歸る事はありません。並々でない佛様のお助けてなければ出る事は出来ません。まあ貴い方いらつしやる。」とをがんで去りました。それからなほ逃げて又都へ入つてかくれてゐますと會昌六年に武宗は崩じて翌年中元年に宣宗が位につき、佛法を滅ぼす事もやみまし

たので思ふまゝに佛法を習つて十年目に日本へ歸つて眞言をひろめたといふ事です。

◆天竺へ渡つた僧が穴に入る事

昔支那に居た坊さんが天竺に渡りまして、用事もありませんがたゞ行つて見たいので方々見物をして歩きましたところある山に大きな穴がありました。この穴に牛がはひつてゆくを見て、行つてみたくなり牛の行くのについて坊さんもはひりました。大分行きますと明るい所へ出ました。見まはしますと他の世界と見えて見た事もない美しい花が咲きみだれてゐます。牛がこの花を食べましたのでためしに自分もこの花を一房とつて食べてみますと、そのおいしい事は天の甘露もこんなだらうと思はれて好くまゝに澤山食べましたのでふとりにふとつてしまひました。いぶかしくて物恐ろしくなりましたので元の穴の方へ歸つて行きますのに初めは何でもなく通られたのが體がふとつたので狭くなりやうやく穴の口までは來ましたが、出る事が出來ないで苦し

くてたまりません。前を通る人に、

「これを助けて下さい。」と言つても聞き入れる人もありませんし助ける人もありませんでした。人の目にもどう見えたのか不思議です。日が重なりまして坊さんは死んでしまひました。それから石になつて穴の口に頭をさし出したやうになつてゐました。玄奘三藏が天竺に渡つた時の日記にこの事は記されてあります。

◆寂照上人が鉢を飛ばす事

昔、三河入道寂照といふ人が支那に渡つてから、支那の天子様が偉い聖達を召し集めて、お堂をかざりお料理を用意してお經を講ぜられました。天子様が、「今日の馳走には給仕役は無い。銘々自分の鉢を飛ばせて物を受けよ。」と言はれます。それは日本の坊さんを試すためです。さて坊さんは上座から順々に鉢をとばせて物を受けます。三河入道は末座につきました。鉢を持つて立たうとします。

「鉢を飛ばせて受けなければならぬ。」と皆が制しとどめましたので寂照が、
「鉢を飛ばす事は別の法です。然し私はまだこの法を習ひません。日本でもこの法をする人もありません。どうして飛ばせませう。」と言つて居ますと、

「日本の聖、鉢がおそいおそい。」と責めますので、日本の方に向つて祈り、

「日本の佛様も神様もお助け下さいまし。恥をお見せ下さるな。」と念じてゐます中に鉢が獨樂のやうにぐる／＼廻つて支那の坊さんの鉢よりも早く飛んで物を受けて歸りました。其時天子様をはじめ皆貴い人だと言つてをがんだと言ひつたへます。

□清瀧川の聖の事

今は昔清瀧川の奥に柴の庵を作つて行ふ坊さんがありました。水のほしい時には水瓶を飛ばせて汲みにやつて飲みました。さうして年を経ましたので、自分ほどの行者は

あるまいと時々慢心を起しました。さうしてゐますうちに自分の居る上の方から水瓶が来て水を汲みます。何者がまたかうするのかと妬ましく思ひまして見現さうとしてゐますうちに例の水瓶が飛んで来て水を汲んで行きます。その時水瓶について行つて見ますと水上五六十町のぼつて庵が見えます。行つてみれば三間ばかりの庵がありまして持佛堂は別によく造つてあります。誠に貴く見えます。小ざれいにして住まつてゐますので、庭には楠の木がありまして木の下に修行をしたあとがあります。關伽棚の下に花の捨てたのが澤山積つてゐます。石だゝみには苦むして神さびてゐます。窓の隙からのぞきますと、机の上にはお經が澤山あつて巻きかけたのなどあります。香の煙がみちてゐます。よく見ますと七八十ばかりの貴さうな坊さんが、五鉢(佛具)をにぎり脇息によりかゝつて眠つてゐます。この坊さんを試してみようと思つてそつと近寄り不動様の呪を唱へて祈りますと火が燃え出して庵につきましました。聖は眠りながら散杖をとつて水にひたして四方にそゝぎますと庵の火は消えて自分の著物に燃え

うつつて焼けます。下の聖は大聲をあげてあわてますと上の聖は目をあいて散杖を持ち下の聖の頭に水をそそぎましたので火は消えました。上の聖が、

「何しにこんな事をするのか。」とききました。答へて、

「私は年頃河岸に庵を結んで行ふ修行者でございます。此頃水瓶が来て水を汲みました時どのやうな方がいらつしやるのかと思ひ見現はさうと参りました。さうして少しお話ししようとか持を致しましたのですがおゆるし下さい。これからは弟子になりますのでせう。」と言ひますと、聖は人が何をいふのかとも思はない様子でした。下の聖が自分ほど偉い者はあるまいと橋慢の心がありましたので佛様が憎んでそれより勝れた聖をつくつて逢はせられたのだと語り傳へます。

◆寛朝僧正の勇力

昔、遍照寺の僧正寛朝といふ人が仁和寺をも支配してゐましたので、仁和寺の壊れ

た所を修理させようと大工達を大勢集めて作りました。日が暮れて大工達が歸つてから今日の仕事はどの位出来たか見ようと思つて、僧正が著物をはし折つて高足駄をはきたつた一人て来て足場の下に立ちよつて薄暗がりの中で見てゐますと、黒い装束をして烏帽子をたれかけて顔もよくは見えない男が僧正の前に出て来て立ちどまり刀を逆様に抜いてかくしてゐるやうにしてゐましたので僧正が、

「何者だ。」とききました。男は片膝をついて、

「困つてゐる者でございます。寒くてたまりませんのでそこに召していらつしやる御召を一二枚いたゞかうと思ふのです。」と言つて飛びかゝらうとする様子なので、

「何でもない事だ。こんなに恐ろしさうにおどさないでたゞくれと言へばよいのに不心得な考だ。」と言つてつと立ちよつて尻をはたと蹴ますと蹴られるまゝに男の姿はかき消したやうに見えなくなりましたので、おもむろに歸つて坊の近くに行き、
「誰か居るか。」と高く呼びますと坊から小坊主が走り出て来ました。僧正が、

「行つて燈をつけて来い。今自分の著物を剝がうとした男が急に消えたのが怪しいから見ようと思ふのだ。坊主達を呼んで連れて来い。」と言ひましたので、小坊主は走つて行つて、

「御坊が追剝にお逢ひになつた。皆さんお出て下さい。」と呼びましたので坊々に居る坊さん達が皆、火を持ち太刀をさげて七八人十人と出て来ました。

「盗人はどこに居りますか。」ときき、ますと、

「こゝに居た盗人が自分の著物を剝がうとしたから剝がれては寒いだらうと思つて尻をぼんと蹴つたら消えてしまつたのだ。火を高くつけてかくれてゐるか見ろ。」と言ひましたので坊さん達は、

「をかしな事をおつしやるな。」と言ひながら火をふりたて、上の方を見ますと、足場の中に落ちさはさまつて動かれない男があります。

「あすこに人が見えます。大工かと思ひますが黒装束をして居ります。」と言つて上つ

て見ますと足場の中にはさまつて身動きも出来ず困りぬいた顔をしてゐます。逆手にとつた刀はまだ持つてゐます。それを見つけて坊さん達が寄つて刀と髻と腕とをつかんで引き上げて下ろして連れて来ました。一緒に坊に歸つてから、

「これからは老法師だからと言つて馬鹿にするな。何もならない事だ。」と言つて著てゐた著物の中で綿の厚いのをぬいでやり、追ひ歸してやりました。

◆ 經頼が蛇に逢ふ事

昔、經頼と言ひます相撲の家の傍に古河がありました。深い淵の所がありました。

夏、その川の傍の木蔭をかたびらだけを著て腰を結び、足駄をはいて杖極杖といふ杖をつき小童一人を供にして散歩をしました。涼まうと思つてその淵の傍の木蔭にゐました。淵は青くて底も見えず恐ろしさうで、蘆やまこなどが生ひ茂つてゐるのを見ながら汀近く立つてゐますと、向ひの岸は三四十間もはなれてゐると見えますが、

水がみなぎつてこちらに來ますのでどうしたのかと思つてゐます中にこちらの岸近くなつて蛇が頭をもたげましたのでこの蛇は大きいのだらう。外へのぼらうとするのかと立つて見てゐますと蛇は頭をもたげてつく／＼とながめます。何を考へるのだらうと思つて汀を一尺ばかり退いて端近く立つて見ますと暫らくみつめて頭を引込めました。さうして向ひの岸の方に水がみなぎると見る中にまたこちらに浪がたつて、蛇が尾を汀よりさし上げて自分の立つてゐる方に近寄せるのでこの蛇の考があるだらうと思つてうつちやつて見てゐますとなほ近寄せて經頼の足に三四度ほどからまりました。どうするのだらうと思つて立つてゐますと巻きついてきり／＼と引きましたので河に引き入れやうとするのだと氣がついて、踏みはだかつて立つてゐますと大へんに強く引くと思ふ間に足駄の齒をふみ折つてしまひました。引き倒されさうなのを用ひしてふみ止まつて立ちますと強く強く引きます。引き取られさうなのを足を強く踏ん張りましたので河岸に五六寸も足をふみ入れて立つてゐました。よく引くなと思つ

てゐますと繩か何かの切れるやうに蛇が切れて水の中にさつと血が湧き出るやうに見えましたので、切れたのだと足を引きますと蛇の切がひかれて上りました。さうして足にからんだ尾をといて水で足を洗ひましたが巻かれたあとが消えませんでしたから、酒で洗ふといくと人が言ふので酒をとりよせ洗ひなどして、後で家來達を呼んで尾の方を引きあげさせましたら大きいとも何とも言ひ様がありません。切口の太さは直径一尺もあらうと見えました。頭の方の切を見せにやりましたら向ひの岸にある大きな木の根に頭の方を幾重も巻いて尾をこちらによこして足をからげてひくのでした。力が足りないで途中で切れたのでせう。自分の體の切れるのも知らずに引いたのでせうがあきれた事です。その後蛇の力は幾人位かたつたかためしてみようと太い繩を蛇の巻いた所につけて十人ばかりで引かせましたがまだ／＼と言つて六十人ばかりかゝつて引いた時にこの位に思ふと言ひました。それを考へますと經頼の力は百人位の力を持つてゐたのかと思はれます。

◆珠の代の無量な事

これも今は昔、筑紫に大夫貞重といふものがありました。此頃居る箱崎の大夫則重の祖父です。その貞重が京へ上りました時、故宇治殿に贈りまた自分の知つて居る人々にも贈物をしようと、支那人から太刀を十腰質にして六七千疋ほどの物を借りました。さうして京へ行つて宇治殿に奉り、知つてゐる人にも思ふままにやりなどして歸ります時淀から舟に乗りますと食事の用意をしましたのでそれを食べなどしてゐますうちに解て商人達が来て、

「これをお買ひになりますか。あれをお買ひになりますか。」などさします中に、

「玉は如何。」と言ひましたのをさゝ入れる人もありませんでしたところ、貞重の供の男が舟の舳に立つてゐましたが、

「こゝへ持つて来い。見よう。」と言ひますと袴の紐の間から眞珠の豆ほどの大きさの

を取り出して渡しましたから著てゐた水干をぬいで、

「これに取り代へるか。」と言ひますと玉を持つてゐた男は得をしたと思つたのか、あつて受取つて舟をはなして去りましたので男も高く買ったのかと思ひましたが、あつて去りましたので悔しいと思ひながらも袴の腰につゝんで他の水干に著換へてゐました。さうしてゐる中に日數を経て博多といふ所に行き著きました。貞重が舟から下りて、物を借りた支那人の所へ行つて、

「質は少なかつたが物は多かつた。」などと言はうと思つて行きますと支那人も待つてゐて喜んでお酒を飲ませなどして話をしました。この玉を持つてゐる男は下種の支那人に逢つて、

「玉を買ふか。」と言つて袴の腰から玉を取り出して渡しますと支那人は玉を受け取つて手の上に置いてゆすつて見まして驚いた顔付で、

「これはどの位。」とききましたから、欲しさうにしてゐる顔色を見て、

「十貫。」と言ひますとあわて、

「十貫に買ひませう。」と言ひました。

「本當は二十貫だ。」と言ひますとそれでも急いで買はうと言ひましたのでそれでは高價のものかと思つて、

「下さい、まあ。」と言ひますと惜みましたがなほ言ひましたので仕方なしに返しましたから、今よく代をきめて賣らうと袴の腰につゝんで、はなれましたので支那人は仕方がなく貞重と話をしてゐる支那人の所へ来て何だかわからない事をしやべりましたのをこの支那人が心得て貞重に、

「お供の方の中に玉を持つてゐる者がありますがその玉をもらつていたゞきたい。」と言ひましたから貞重が人を呼んで、

「供の者の中に玉を持つた者があるか。それを探して呼べ。」と言ひますとこのしやべる支那人がかけ出してやがてその男の袖をつかまへて、

「さあこれだこれだ。」と引き連れましたので貞重が、

「本當に玉を持つてゐるのか。」ときゝますから、澁々あることを言ひますと、

「さあおくれ。」と乞はれて、袴の腰から取り出しましたのを貞重が家來に受取らせました。それを取つて向つてゐた支那人は手に入れてゆすぶつてみて内へかけ込みました。どうしたのかと見るうちに貞重の七十貫の質に取つた太刀を十とも渡しましたので貞重はあされた様子でゐました。古水干一つに代へたものをそれだけの物に代へたのは本當にあされるほどの事です。

玉の代は限りのないものといふ事は今にはじまつた事ではありません。筑紫にとらしせうずといふ人がありました。それが話したのは、他所へ行きました途中で男が、

「玉をお買ひになりますか。」と言つて反古のはしきれにつゝんだ玉を懐中から出して渡したのを見れば木樂子よりも小さい玉でした。

「これはいくらか。」とききましたら、

「絹二十疋。」と言ひましたのであきれて他所へ行くのをやめて玉の主の男を連れて家に歸り絹のあつたまゝに六十疋やりました。

「これは二十疋ばかりではあるまいのに少なくいふのがしをらしいから六十疋やるのだ。」と言ひましたのでその男は喜んで行きました。その玉を持つて支那に行きましたところ途中が恐ろしくございましたが身を放さずお守などのやうに頸にかけておましたら、嵐が起りましたので支那人は荒い浪風に逢へば舟の中で一番の寶と思ふ物を海に入れるのですが、

「このせうずの玉を海に入れよう。」と言ひましたから、せうずが言ひましたには、

「この玉を海に入れては生きてもつまるまい。自分の體ごと入れる。」とかへておました。さすがに人を入れるわけにも行きませんのでかれこれ言つてゐます中に玉を失はずにすむ運があつたのか、風がなほりましたので喜んで入れませんでした。その船

の一番の船頭といふのも大きな玉を持つてゐましたが、それは少し平てこの玉よりは劣つてゐました。それから支那に行きついて玉を買はうといふ人の所へ船頭がこの玉をせうずに持たせてやりましたところ途中で落してしまひました。驚き騒いで歸つて探しましたが分りませんので思ひわびて、自分の玉を持つて、

「あなたの玉を落しましたから仕方がありません。その代りにこれをなさい。」とやりましたら、

「私の玉はこれには劣つてゐました。その代りにこの玉をいたゞいてはすみません。」と言つて返しましたが、さすがにこの國の人とは違つてゐます。日本人ならば取るでせう。それからこの失つた玉の事をなげきながらも遊びに行きました。女と話をしてゐますと胸をさぐつて、

「どうしてこんなに動悸がするのです。」とききましたから、

「かういふ人の玉を落してそれを大變な事と思ふので胸さわぎがするのだ。」と言ひま

したので、

「御無理もないことです。」と言ひました。

さて歸つて二日ばかり過ぎてこの女の所から、

「用がございますから直ぐに來て下さい。」と言つて來ましたので何事かと思ひながら入りますと、
ますと表の方からは入れず裏から呼び入れましたので何事かと思ひながら入りますと、

「若しやこれはあなたの落した玉ではありませんか。」と言つて出したのを見ますと間
違もなくその玉です。

「こりやどうした。」とあされてきゝますと、

「こゝを玉を賣らうと言つて通りましたのを、そのやうなことをおつしやつたと思つ
て呼び入れて見ますと大きな玉でしたからもしやさうではないかと思つて止めてお
いてお呼び申したのです。」といふので、

「言ふまでもない。どこにゐる。その玉を持つてゐた者は。」と言へば、

「あすこにゐます。」といふのを呼ばせて玉の主の所へ連れて行つて、

「これはかういふ譯でどこそこに落した玉だ。」と言ひますと争はず、

「そこで見付けた玉でした。」と言ひました。少しばかり物をやりました。さてその玉
を返してから、唐綾一つを支那では美濃の絹五疋ほどに遣ひますが、せうずの玉を唐
綾五千反に代へました。その代を考へますにこゝでは絹六十疋に代へた玉を五萬貫に
賣つたのです。それを思へば貞重の七十貫の質を返したのも驚く事でもない事だつた
と人が話しました。

◆大將の慎みの事

昔、天文博士が、月が大將屋を犯すといふ書付を奉りましたので近衛の大將はよ
く慎むやうにと言つて、小野宮右大將(實賴)はいろくのお祈などをし、春日神社や
山階寺などにもお祈を澤山させました。其時左大將は枇杷左大將仲平(實賴の伯父)と

いふ人でした。東大寺の法藏僧都はこの左大將の御祈をする人ですが、屹度お祈があるだらうと待つてゐますのに音沙汰もありませんので氣が、りて京へ上り枇杷殿へ行きまされた。大將が逢つて、

「何用で上られたのか。」といへば僧都が、

「奈良でうかゞへば左右の大將はお慎みになるやうにと天文博士が申したと言つて右大將殿は、春日神社や山階寺などにおいのりをいろ／＼に遊ばせば、殿様からも定めし仰せがございませうと思ひまして問ひ合せますとその様な事もうかゞひませんと皆申しますから不安に思つて参りましたのです。お祈を致した方がよろしうございませう。」と申しましたので左大將が、

「尤もの事だ。然し自分が思ふには、大將は慎めといふのに自分も慎んだら右大將のために悪い。あの大將は才も賢い。年も若い。これから長く朝廷にお仕へする人だ。自分は大事な事もなく年もとつてゐる。何如ならうとも何でもないと思つて祈らない

のだ。」と言ひましたので僧都はほろ／＼と泣いて、

「百千のお祈にも勝りませう。このお心持では恐れもございませう。」と言つて歸りました。それで何事もなく後に大臣になつて七十あまりまで生きてゐました。

◆御堂關白の犬の事

昔、御堂關白(藤原道長)が法成寺を建てましてからは、毎日お堂へ行きましたが、白い犬を可愛がつて飼ひましたのでいつもはなれずにお供をしました。ある日いつものやうにお供をしました。門を入らうとするこの犬が前に立ちふさがるやうにして吠えまはり中へ入れまいとしましたので、何でもないと思つて車から下りて入らうとすれば着物の裾をくはへて引きとめようと思ひましたから、何か譯があるのだらうと榻をとりよせて腰をかけて、晴明に、

「必ず来い。」と迎へにやりましたので晴明はすぐに來ました。

「こんな事があるがどうしたのだ。」とたづねますと、晴明が暫らく占つて、

「これは殿様を呪ふものを道にうづめてございます。お通りになつたらあわるうございませう。犬は神通力があるのでお知らせ申したのです。」と言へば、

「さうしてそれはどこに埋めてあるか見付けろ。」と言ふので、

「何でもございませぬ。」と言つて少しの間占つて、

「ここでございます。」といふ所を掘らせて見ますと、土を五尺ばかり掘つた所に案の定物がありました。土器を二つ合せて黄色の紙捻で十文字にからけてあります。開いて見ると中には何もありません。朱で一文字が土器の底に書いてあるばかりです。

「晴明の外には知つてゐるものはございません。若しや道摩法師(蘆屋道満)がしたのかも知れません。一つ糺して見ませう。」と言つて懷中から紙を出して鳥の形に結んで呪を唱へかけて空へ放り上げましたら忽ち白鷺になつて南を指して飛んでゆきました。

「この鳥がとまるところを見て来い。」と下部をやりますと、六條坊門萬里小路の邊の

古い家の木戸の中へ落ちました。家の主人は老いた坊さんでしたが縛つて來ました。呪つた譯をさしますと、

「堀川左大臣顯光公の仰せて致しました。」と申しました。

「この上は流罪にする筈だが道摩の罪ではない。」と言つてこれからこんな事はするなと本國の播磨へ追ひやりました。この顯光公は死んだ後に怨靈になつて關白に祟をしました。悪靈の左府と言ひます。犬はなほく可愛がつたといふことです。

◆高階俊平の弟の入道の算術

これも今からは昔、丹後前司高階俊平といふ者がありました。後には坊さんになつて丹後入道と言つてゐました。その弟で位もない者がありました。それが主人の供で筑紫にゐましたうちに、新らしく渡つた支那人で大へん上手に算術をするものがありました。それに逢つて、

「算術が習ひたうございます。」と言ひましたら、初めはよくも教へませんでした。少しさせてみまして、

「上手になるであらう。日本にゐては算術はつまらない事になつてゐるから何にもならない。自分と一緒に支那へ行くと言ふなら教へよう。」と言ひましたから、

「よく教へてくれて上手になつたら言ふ通りにさせよう。支那へ行つても役にさへ立ててくれるならば言ふ通りに支那へも一緒に行きませう。」など、體よく言ひましたので、それをあてにして心を入れて教へました。教へるに従つて一をきいて十を知るやうになりましたので支那人も大へんほめて、

「自分の國で算術をする者は多いけれどもお前ほどに知つたものはないのである。屹度自分と一緒に支那へ行け。」と言ひましたから、

「言ふまでもありません。言ふ通りにさせよう。」と言ひました。

「この算術には病氣をなほす術もある。また病氣はしないが、惜いとか妬ましいとか

思ふ者を直ぐに殺す術などもあるが少しも惜みかくさずお前に教へようと思ふから屹度自分と一緒に行く約束をしる。」と言ひましたから、眞面目にはせず少ししますと、

「人を殺す術は支那へ行く船の中で教へよう。」言つて他の事はよく教へましたがその一事は教へませんでした。その中によく習ひ傳へましたが、主人が用で急に京へ上る事になりましたのでその供をして上りますのを支那人はきいてとめましたけれども、

「永年お仕へしてゐる方がかういふ用で急にお上りになるのをどうしてお送りせず居られませう。たしかにお思ひ下さい。決して約束は違へません。」などとなだめましたので本當と支那人は思つて、

「それでは屹度歸つて来い。今日明日にも支那へ歸らうと思ふのだから、お前の來るのを待つて歸らう。」と言ひましたからその約束をかたくして京へ上りました。世の中がつまらないので支那に渡らうかと思ひました。京へ上りますと親しい人々にとめられ、俊平入道などもきいてとめましたので筑紫へさへ行かずになりました。この支

那人は暫らく待ちましたのに音づれもないのでわざ／＼使をよこして手紙でうらんでよこしましたけれども、年をとつた親があつて今日明日も分らないからその成行を見たと上で行かうと思ふのだと言つてやつて行きませんでしたので、暫らくは待ちました。が、だましたのだと思つて支那人はその男をよく呪つて支那へ歸りました。その男は始めは大そう賢かつたのが支那人に呪はれてからは大へんぼけて物も覺えないやうになりましたので仕方なしに坊さんになりました。入道の君と言つてぼけてしまひ大した事もなく俊平入道の所と、山寺などに行つてゐました。或時、若い女房達が集まつて庚申をしました晩に、この入道が片隅にぼんやりした様でゐましたのを、夜のふけるに従つて皆ねむたがつて、中で若く生意氣な女房が、

「入道の君のやうな人はをかしい話をするものだ。皆の笑ふやうな話をなさい。笑つて目をさませませう。」と言ひましたので入道は、

「自分は口不調法で人のお笑ひになるやうな話は出来ませんでせう。然し笑はうとい

ふだけなら笑はせてあげませう。」と言ひますと、

「話をせずにたゞ笑はせようといふのは猿樂をなさるのか。それは話より結構な事とせう。」ともう笑ひましたので、

「さうではありません。たゞ笑はせてあげようと思ふのです。」と言ひましたから、

「そりやどうなのです。早くお笑はせなさい。さあ／＼。」と責められて、何だか物を持つて明るい所へ出て来て、何をするのかと見れば算木の袋をといひ算木をさら／＼と出しましたのでこれを見て女房達は、

「これがをかしい事なのですか。」と「さあ／＼笑ひませう。」など、あざけるのを答へもせずに算木をさら／＼と置いてゐました。置いてしまつて、巾七八分ばかりの算のあるのを一つ取り出して手で捧げて、

「あなた方それではひどく笑つておあやまりになるな。さあ笑はせませう。」と言ひましたので、

「その算を捧げてゐるのが馬鹿氣てゐてをかしうございます。どうして閉口するまで笑ひませう。」など、言ひ合つてゐますとその八分ばかりの算を下に置き加へると見るうちに居る人が皆何となく笑ひ出しました。幾度も笑ひとめようとしますが駄目でおなかの腸が切れるやうで死にさうなので涙をこぼし、仕方がなくて笑つた者達が物も言ひ得ないで入道に向つて手を合せましたので、

「それだから申したのです。お笑ひあきになりましたか。」と言ひましたから、うなづいてころがりながら笑ひさわいて手を合せましたので、よくあやまらせてから置いた算をばら／＼にこはしましたので笑ひがとまりました。

「まう少ししたつたら死んだらう。こんなに苦しい事はなかつた。」と言ひ合ひました。笑ひ苦しんでより集まつて病氣のやうにしてゐました。かうですから人を殺したり生かしたりする術があると云つたのも習つたらどんなだらうと人も言ひました。

算術は恐ろしい事だと言ひます。

◆頼時が胡人を見た事

昔、胡國といふのは支那よりもずつと北だといふのを奥州の地續さではないかと、宗任法師と言つて筑紫にゐたのが話しました。この宗任の父は頼時と言つて陸奥國の夷で朝廷に従はないといふので攻めようとされましたら、

「昔から今まで朝廷に勝つ者はない。自分は過ちをしないと思ふがお叱りばかりを受けるから身のあかりを立てる事も出来ないのを、奥州から北の方に見渡される土地があるがそこへ渡つて様子を見て住まはれる所ならば自分に従ふ者を皆連れて渡つて住まう。」と言つてまづ舟を一艘造つてそれに乗つて行つた人々は、頼時、厨川の次郎、鳥海の三郎、その他親しい家來達二十人ばかりで食物など澤山持つて舟を出しました。右左はひろい葦原でしらいくも行かない中に見渡される所なので渡りつきました。右左はひろい葦原でした。大きな川の湊を見つけてその湊に入りました。人が見えるかと思ひましたけれども

人影もありません。陸に上られる所があるかと思いましたが葦原で道もありませんでしたので若し人のゐる所があるかと川を上つて七日ゆきました。然し同じやうなのであきれてなほ二十日ほど上りましたが人の氣勢もしませんでした。三十日ばかり上りましたら、地面が響くやうなのでどんな事があるのかと恐ろしくて葦原の中にかくれて響のする方をのぞいて見ましたら、胡人と言つて繪に描いた通りの姿をした者が、赤い物で頭を結つて馬に乗り揃つて出て來ました。これはどうした者かと思つてゐますと續いて數も知られないほど出て來まして河原の端に集まつてきいたこともない事をしやべり合つて河にばらばらと入つて渡りましたが千騎ほどあらうかと思つて見ました。この足音が響いてかすかにきこえたのでした。歩いてゐる者を馬に乗つた者の傍に引きつけて渡りましたのをたゞ歩いて渉る所だらうと思つた。三十日ばかり上りましたのに一ヶ所も渡瀬のなかつた川ですから、あすこそ渡瀬だと思つて人が過ぎてから近寄つて見れば同じやうに底も分らない淵でした。馬筏を作つて泳がせたのに歩いて

ゐる人はつかまつて渡つたのでせう。これから上つても限りもなく思はれたので恐ろしくてそこから歸りました。さうして間もなく頼時は死にました。それで胡國と日本の東北地方とはさし向つてゐると申しました。

◆門部府生が海賊を射返す事

昔、門部府生といふ舍人がありました。若くて貧乏でしたが弓が好きで射ました。夜も射ましたので少しばかりの家屋根板をはがして燈をつけて射ました。妻もこの事を快く思はず近所の人も、

「なんてつまらない事をするのだらう。」と言ひますが、

「自分の家もなく射るのは誰も構ふことはない。」となほ屋根板を燈して射ます。これを悪く言はない者はありません。其中に家根板が皆なくなりましたので終ひには棧や橋を焼き又それから棟や梁を焼きました。後には桁や柱も皆割つて焼きました。

「何とあされたことだ。」と言ひ合つてゐる中に板敷からねだまでも皆焼いて隣の人の家にとまりましたのを家主がこの人の様子を見ますとこの家も壊して焼きさうだと思つて、さう言つても、

「いつまでかうしてゐませう。お待ちなさい。」などと言つてゐますうちによく射るといふ噂が立つて召し出されて弓の勝負をしますと上手に射ましたので御威じになつて終ひには相撲を募る役になつて下りました。大勢のよい相撲を集め、又澤山の物を持つて上りますと、かばね島といふ所は海賊の集まる所ですが、そこを過ぎます時に一緒にゐる者が、

「あれをごらんなさい。あの舟は海賊の舟どもてせう。どうなさいます。」と言ひますから、この門部府生が、

「皆さわぐな。千萬の海賊が居るとも見て居れ。」と言つて皮子から弓の勝負の時に著ました装束を取り出してちやんと著け、冠や老懸など式通りにしましたので家來達

が、

「これはお氣が違ひましたか。叶はないまでも楯でお防ぎになりませ。」といらだちあひました。正しく著てから肩を脱いであたりを見廻して屋形の上に立つて、

「もう十五間位に近寄つたか。」と言へば供の者どもは、

「かれこれ申すに及びません。」と言つて吐いてゐます。

「どうだ。その位近くなつたか。」と言へば、

「十五間位に近づきましたらう。」と言ひます。其時上屋形へ出て弓矢を取つて身構へし、弓をかざして立ち上りましたので海賊の頭立つ者が黒つぼい著物を著て赤い扇を開いて遣ひながら、

「大急ぎで漕ぎ寄せて乗り移つて取れ。」と言ひますがこの府生は落着いてよく引いてゆつくり射て弓を横にして見ますとこの矢は目にも見えずに頭立つ海賊のゐる所へ飛んで行つて早速左の目に刺さりました。海賊はあつと言つて扇を投げすて、仰向けに

倒れました。矢を抜いて見ますと眞面目に戦ひなどする時のやうなのでなくつまらない物です。これを海賊達は見て、

「おやこれは普通の矢ではない。神箭だつた。」と言つて、

「早く早く皆漕ぎもどれ。」と逃げました。その時門部府生はうす笑ひをして、

「自分達の前にあふなく来る奴どもだ。」と言つて肩を入れて睡をしてゐました。海賊はあわて、逃げたので袋を一つに少しばかりの物を落したのが海に浮びましたからこの府生が取つて笑つて居ましたとかいふことです。

◆極樂寺の僧が仁王經の驗を施す事

これも昔、堀川太政大臣(藤原基經)といふ人が重い病氣にかゝりました。お祈をいらくして名ある坊さん達の行かないのはありません。集まつてお祈をします。家中大騒ぎです。ところが極樂寺は大臣の造つた寺ですがその寺に住んでゐる坊さん達

にはお祈をしろといふ命けもありませんでしたので人も呼びません。この時或坊さんの思ひますには、お寺に安樂に住むのは殿のお蔭だ。殿が亡くなられては生きては居られない。お呼びにならなくても行かうと、仁王經を持つて大臣の邸へ行き、騒々しいので中門の北の廊の隅にかゝまつて少しも目をかける人もないのに仁王經を餘念なくよんでゐました。二時ばかり過ぎて大臣が、

「極樂寺の僧某の大徳はこゝにゐるか。」とたづねますと或人が、

「中門の脇の廊に居ります。」と申しましたので、

「それをこつちへ呼べ。」と言はれるのに皆不思議に思つていくらも貴い坊さんがあるのにそれを呼ばずに、かうして來たのさへも無駄だと思つてゐたのを呼ぶのを心得がたく思ひましたが、行つて其事を言へば來ます。高僧達の並んでゐる後の縁にかしこまりました。

「來たか。」ときかれると、南の簀子にゐる事を言へば、

「内へ呼び入れる。」とねてゐる所へ呼び入れます。何も物を言はず重うございましたのにこの坊さんと呼ぶ時の様子はこの上なくよく見えましたので皆怪しく思ひましたと言ひますやう、

「わたところが夢に恐ろしさうな鬼どもが自分を銘々打ちたたくとびんづらを結つた童の鞭を持つたのが中門の方から入つて来て鞭でこの鬼達を打ち拂ふと鬼達は皆逃げました。『何の童がかうするのか。』ときいたら、『極樂寺の某がかうしてあつたらひになることを大へん歎いて年頃讀む仁王經を今朝から中門の脇に居て餘念なくよんでお祈をして居ります。そのお經の護法の神がおなやませ申す悪鬼どもを追ひ拂ふてございます。』と言ふと見て夢がさめると氣分が拭ふやうによいのでその禮を言はうと呼んだのだ。」と手を合せてをがみ、棹にかゝつて居る著物を取つてやりました。

「寺へ歸つてなほよくお祈をせよ。」と言へば喜んで歸りますのを坊さんやさうでない人が見ますに此上もない様子をしてゐます。中門の脇に一日かゝんでゐた時は見返りへたのもそのわけです。

◆伊良縁の世恒に毘沙門が文を下さる事

今は昔、越前國に伊良縁の世恒といふものがありました。一番信仰する毘沙門様に、物も食べませんでおなかがすきましたので、お助け下さいと申してゐますうちに門口にきれいな女が来て、

「御主人にお話があるとおつしやつて下さい。」と言ひましたので誰であらうと思つて出て逢ひますと土器に物を一ぱい入れて、

「これを召し上げ。何か食べたいとおつしやつたから。」と言つてくれましたので喜んでもらつて少し食べますと一ぱいになつた心持がして二三日は食べたくもないので、

伊良縁の世恒に毘沙門が文を下さる事

何か食べたい時にはこれを少しづつ、食べてゐますうちに幾月か過ぎてこれもなくなり、
ました。どうしようと又念じてゐますと前のやうに人が言ひましたので始めのやうに
あわてゝ出てみますと前の女が言ひますには、

「この下文を上げませう。これから北の谷や峯を百町越えると中に高い峯があります。
そこへ立つて『なりた。』と言へば物が出て來ませう。それにこの文を見せてくれる物
をおもらひなさい。」と言つて去りました。この下文を見ますと、米二斗わたすべしと
書いてあります。そこでその通りに行つてみますと本當に高い峯があります。そこで、
なりたと呼びますと恐らしい聲で返事をして出て來た者があります。見ると額に角が
生えて目が一つあるものが赤い禪をして出て來て膝まづいてゐます。

「これは御下文だ。この米をくれ。」と言へば、

「さういふ事がございます。」と言つて下文を見て、

「これは二斗とございますが一斗を上げるとございました。」と言つて一斗をくれまし

た。そのまゝ受取つて歸りその入れた袋の米を遣ひますと一斗のが盡きませんでし
た。千萬石も取つても同じやうに一斗はなくなりませんでした。これを國守がきいて
世恒を呼んで、

「その袋を自分にくれ。」と言ひましたので、國の中にある身なので斷りかねて、

「米百石の分だけ上げます。」と言つてやりました。一斗取ると又出て來出て來しまし
たので大へんな得をしたと思つて持つてゐました中に百石取つてしまひましたので米
はなくなりました。袋ばかりになりましたのであてがはづれて返してやりました。世
恒の所で又米が一斗出て來ました。さうして大へんな長者になつてゐました。

◆相應和尚の事

昔、比叡山の無動寺に相應和尚といふ人がありました。比良山の西の葛川の三瀧と
いふ所に通つて行ひました。その瀧で不動様に、

「私を背負つて都卒天の内院の彌勒菩薩の所へ連れて下さい。」と強ひて言ひましたので、

「非常にむづかしい事だけれども無理にいふ事だから連れて行かう。その尻を洗へ。」と言はれたので瀧の下で水を浴びよく洗つて明王の頭に乗つて都卒天にのぼります。その内院の門の額に妙法蓮華と書いてあります。明王が、

「こゝへ来て入る人はこのお經を誦して入れ。誦さなければ入れない。」と言ふので、見上げて相應が言ひます。

「私はこのお經は讀みますが誦する事はまだ出来ません。」と言ひますと明王が、

「それは残念な事だ。それでは入る事は出来ない。歸つて法華經を誦してから來なさい。」と背負つて葛川へ歸りましたので大へん悲しみました。それから御本尊の前でお經を誦して思ひを叫へたさうです。その不動様は今でも無動寺にあります。等身の像です。

この和尚はこのやうに特別の験があつたので染殿の后(藤原良房の女明子)がものゝけになやまれましたのを或人が、

「慈覺大師の御弟子の無動寺の相應和尚と申すのが大へんよい行者でございます。」と申しましたので呼びにやりました。直ぐにお使が連れて來まして中門に立つてゐます。皆が見ると背の高い鬼のやうな坊さんが目の粗い麻の衣を着、相の足駄をはいて大きな木樂子の數珠を持つてゐます。その風體は御前に召すやうな者ではなく大變な下種法師だと、

「たゞ簀子のあたりに立ちながらお祈を致せ。」と皆言つて、

「御階のおぼしまの所で立ちながらなされ。」と言ひつけましたので御階の東の脇のおぼしまに立ちながらよりかゝつて祈ります。宮は寢殿の奥に御寢なつていらつしやいます。苦しうなお聲が時々御簾の外にきこえます。和尚は僅かにそのお聲をきいて大聲にお祈をします。その聲には明王も現はれると御前にゐる人々はふるふるやうに

思ひました。暫らくすると宮は紅の御召二枚ほどにつままれて鞠のやうに御簾の中
からころがり出ていらしつて和尚の前の簀子に投げおかれしました。皆騒いで、
「みつともない。内へお入れ申して和尚も御前に居よ。」と言ひますが和尚は、
「こんな乞食でございますからどうして上りませう。」と言つてちつとも上りません。
はじめ召し上げられなかつたのを不平に思つてたゞ簀子で宮を四五尺はなれて打ちま
す。人々は困つて几帳などを持ち出して立てかくし中門をしめて人を拂ひましたがそ
れでもあらはです。四五度ほど打つて投げ入れ投げ入れ祈りましたので元のやうに内
へ投げ入りました。それから和尚が歸らうとしますと、

「少しお待ち下さい。」ととめますが、
「久しく立つてゐて腰が痛うございます。」と耳にも入れず出ました。宮は投げ入れら
れてからのけがさめて御心持がよくなりました。験が著しいと言つて僧都に任
じるといふ仰せが下りましたが、

「このやうな乞食は何で僧綱になりませう。」と申してお返し致しました。其後も召さ
れましたが、京は人を馬鹿にする所だと言つて決して參らなかつたさうです。

◆仁戒上人の事

これも今は昔、奈良に仁戒上人といふ人がありました。山階寺の坊さんです。學問
智恵とも寺中に並ぶ者がありません。それですのに急に道心を起して寺を出ようとし
ましたら其時の別當の興正僧都が大へんに惜んでとめて出しません。困つて西の村の
人の娘を妻にして行きましたので人々がだんく噂をしはじめました。人にすつかり
知らせようと家の門口でこの女の首に抱きついて立ち添つてゐますと通る人を見てあ
きれていやに思ひました。墮落したと人に知らせるためです。然しこの妻と一緒に居
ながらも堂に入つて夜中眠らずに涙を流して行ひました。この事を別當僧都がきいて
なほく貴んで呼びよせましたので仕方がなくて逃げて、葛下郡の郡司の聲にな

りました。數珠などもわざと持ちませんが心ではなほ堅く行ひました。すると添下郡の郡司がこの上人に目をつけて大へん貴みましたので、行先も定めず歩く後について上人の世話をしました。上人は、どう思つてこの郡司の夫婦は自分にねんごろにするのかと思ひその譯をさしますと郡司が、

「何故でもございませぬ。たゞ貴く思ひますのでこのやうにお仕へ申すのです。然し一事申さうと存じます事がございませぬ。」と言ひます。

「何事か。」ときけば、

「御臨終の時にはどうしてお逢ひ申しませう。」と言ひましたので上人は何でもない事のやうに、

「たやすい事であらう。」と言へば郡司は手を合せて喜びました。さうして幾年か過ぎまして或冬雪の降りました日の夕方に上人が群司の家に来ました。群司は喜んでいつものことなので食べ物を召使にもさせず夫婦が自分でして食べさせました。上人はあ

湯などもつかつてぬました。翌朝は郡司夫婦は早く起きて料理をいろ／＼こしらへますと上人のねて居る方が大へんよい香がします。香が家中に一ばいになりました。これはよい香などをたくのだらうと思ひました。朝は早く出ると言ひましたが夜が明けても起きませぬ。郡司が、

「お粥が出来ました。この事を申せ。」と弟子にいふと、

「怒りつばい上人ですから言ひ方が悪かつたらぶたれませう。まうお起きになるでせう。」と言つて居ました。その中に日も出ましたのでいつもはこんなにおそくまではないのにかしいと思つて近寄つて聲をかけましたが返事がありません。あけて見ますと西に向つて正しく坐り合掌して最早死んでおました。あきれるとも何とも言はれません。郡司夫婦や弟子達などが悲しみ泣きながらまた貴んでをがみました。明方に香がしたのは極樂からのお迎へだつたと思ひ合せました。臨終に逢ひたいと言つたのでこゝへ來られたのだと郡司はなく／＼お葬ひの事を言ひつけましたさうです。

◆秦始皇が天竺から来た僧を監禁する事

昔、支那の秦始皇の時に天竺から坊さんが来ました。天子様が不審に思つて、

「これは何者だ。何をしに来たのか。」ときまますと坊さんが、

「お釋迦様のお弟子でございます。佛法を傳へるために遠く西天竺から渡つて来ましたので、

天子様は腹をたてられて、
「その風は怪しい。頭が割つてある。著物の形も人と違つてゐる。佛のお弟子といふが佛とは何だ。これは怪しい者だから返してはならぬ。獄に入れる。これからこのやうに怪しい事をいふ者は殺させるがよい。」と言つて獄に入れられました。

「よくしめ込んで重くいましめよ。」と言ひつけました。獄の役人は命のまゝに重罪人をおく所に入れて戸にしつかり錠を下ろしました。この坊さんは、

「悪王に逢つてこんなひどい目に逢ふ。自分の師のお釋迦様はいらつしやらなくなつ

てもちやんと見ていらつしやるだらう。私をお助け下さい。」と祈りますとお釋迦様

が一丈六尺の姿で紫と黄金の光を放つて空から飛んで来られこの牢の門をふみ破つ

てこの坊さんを取つて去りました。そのついでに大勢の盗人が皆逃げてしまひました。

牢の役人は空に物音がしたので出て見ますと金色をした坊さんが光を放つて大きさは一丈六尺なのが空から飛んで来て牢の門を破つておしこめられてゐる天竺の坊さんを取つて行く音でしたので、この事を申しますと天子様も非常に恐れたそうです。その時傳はらうとした佛法はその後、漢の時に傳はつたのです。

口譯 御伽 宇治拾遺物語 終

大正七年九月五日印刷
大正七年九月十五日發行

定價金壹圓貳拾錢

口譯宇治拾遺物語
著作權所有

著者

外山たか子

發行者

大倉廣三

東京市京橋區南橫町十八番地

印刷者

高橋郡二郎

東京市京橋區西紺屋町二十七番地

發行所

廣文堂書店

東京市京橋區南橫町十八番地

振替東京四六八三四
電話京橋二四六三



再版 ■ 文學博士 上田 萬年先生著 □ 乾坤一擲の壯舉を見ずや
 四六判洋綴函入 全一冊三百五十頁 定價金壹圓貳拾錢 送料金八錢

再版 ■ 男の中の男たる英雄豪傑を捉へて彼等の試みたる雄圖と仁俠とを精叙し又其の半面を描いて側々涙なき能はざらしめ、且大學珍藏の繪畫を挿入したるは錦上添花の妙ありと言ふべし。
 文學博士 佐々木信綱先生著 □ 國學者の眞面目を知れ
 四六判洋綴函入 全一冊二百二十頁 定價金九拾錢 送料金八錢

再版 ■ 國文學の泰斗たる博士が眞淵と宣長の遺跡を探り資料を蒐め以て前人未發の新研究を發表せられたるもの、所謂適確縱橫、行文流麗永く千古に傳ふべき好著也。敢へて必讀好評を望む
 文學博士 井上哲次郎先生著 □ 不滅なる人格を磨け
 菊判布製函入 全一冊六百五十頁 定價金貳圓參拾錢 送料金拾貳錢

再版 ■ 加茂眞淵と本居宣長
 文學博士 井上哲次郎先生著 □ 不滅なる人格を磨け
 菊判布製函入 全一冊六百五十頁 定價金貳圓參拾錢 送料金拾貳錢

再版 ■ 世は既に澆季、萬人悉く成吉思汗思想に囚はれて人格の尊嚴なるを知らず。博士大いに之を憂苦し、深遠なる學殖を傾盡し椽大の筆を揮うて具に人格修養の要諦を道破せらる。急讀を乞ふ
 文學博士 井上哲次郎先生著 □ 不滅なる人格を磨け
 菊判布製函入 全一冊六百五十頁 定價金貳圓參拾錢 送料金拾貳錢

再版 ■ 文學博士 佐々木信綱先生著 □ 趣味富贍なる一大文集
 新形布製函入美本 全一冊四百八十頁 定價金壹圓貳拾錢 送料金八錢

再版 ■ 艶麗花の如き筆にて或は四季折々の感想を叙べ、或は旅情を抒へ、或は古人を論ひ、或は所思を綴るなど、之を讀む者をして轉た感慨を深からしむるものあり、文に志す者の必讀書也
 文學博士 井上哲次郎先生著 □ 不滅なる人格を磨け
 菊判布製函入 全一冊六百五十頁 定價金貳圓參拾錢 送料金拾貳錢

再版 ■ 齋藤梅子女史著 □ 女子消息文の白眉として好評噴々
 菊判大和綴美本 全一冊二百頁 定價金參拾五錢 送料金六錢

再版 ■ 消息事 女子文のはやし
 菊判大和綴美本 全一冊二百頁 定價金參拾五錢 送料金六錢

再版 ■ 三宅花圃女史著 □ 氣品高くして運筆自在なる習字帖
 菊判和裝横綴 全一冊 定價金六拾錢 送料金六錢

再版 ■ 習字 玉づさ
 菊判和裝横綴 全一冊 定價金六拾錢 送料金六錢

再版 ■ 文章家として令名高き女史はまた能筆家として世に知られ、其の手蹟を望む者甚だ多し。乃ち日用手紙の文の揮毫を請ひ、以て本書を成す、宜しく一本を備へて習字の友とせられよ。

文學博士 上田萬年先生著 □奮闘苦學成功の活模範也
新 井 白 石
 新形布製函入美本
 全一冊三百三十頁
 定價金壹圓貳拾錢
 送料金八錢

「男子生れて封侯を得ずんば、死して閻魔王たるべし」と傲語せる白石の大志と奮闘功業とを力説して復餘蘊なく、行文明快、記事痛烈、懦夫をして興起せしむ。敢て諸君の愛讀を乞ふ
 文學博士 坪内逍遙先生序 □人生の半面を描いて濃艶
情 話 友 禪 姿
 新形洋綴美本
 全一冊二百餘頁
 定價金六拾錢
 送料金六錢

「沖の石とは愚かの沙汰よ、かはく間もなき袖の海京と東の色くらべ、昔近松の麗筆に彩られたる艶話を現代式に描出したるもの、蘭燈の下之を緋かば夜の曉に至るを知らざるべし。
 法學博士 浮田和民先生著 □全國民の精神的滋養物也
人 格 と 品 位
 四六判布製函入美本
 全一冊五百頁
 定價金壹圓五拾錢
 送料金拾貳錢

高島平三郎先生著 □大好評兒童心理學の最高權威
兒 童 心 理 講 話
 菊判布製函入美本
 全一冊六百頁
 定價金貳圓七拾錢
 送料金拾貳錢

兒童の必理狀態を知らずして之を育てんとするは恰かも闇夜に丸木橋を渡るが如く甚だ危険也。嬰兒幼兒小兒幼年少年青年の心理の發達變化を知らんと欲せば須らく本書を味讀せよ
 柴崎ゆう子女史著 □偽りなき描寫に眞理を含む
我 が 兒 の 愛 撫 八 年
 四六判洋綴美本
 全一冊三百五十頁
 定價金壹圓貳拾錢
 送料金八錢

溢る、計りの愛に満ちたる母が我が兒の生ひ立ち行く有様を観察して端的に率直に描きたる面白くして有益なる育兒日記にして、育兒上實に空前絶後の好著也。子を有つ人は愛讀あれ
 小關源助先生著 □兒童教養の眞髓は收め本書に在り
子 供 の 氣 質 と 育 て 方
 四六判布製美本
 全一冊三百四十頁
 定價金壹圓
 送料金八錢

心理學の教ふる所によりて子供の氣質を分類し其の特長並に短所を指摘し、且教育的見地に立ちて子供の育て方と躰け方を最も通俗的に述べたるもの也。切に世の父母の一讀を望む。

■松江みと子女史著 □可愛き我が子の洋服姿を見よ

版八十 ■**子供西洋服の拵へ方** 菊判布製美本 全一冊三百餘頁 定價金壹圓貳拾錢 送料金八錢

男兒用女兒用洋服三十六種に就き其の紙形の拵へ方、切地に形紙を宛て、裁つ心得、縫方の順序等を詳細に述べたる實用書にして、一讀直ちに應用製作し得ること請合也。必讀を乞ふ

■藤井葆光先生著 □季節々々の美味なる揚物を味食せよ

版三 ■**和洋あげ物料理** 新形洋綴美本 全一冊百五十頁 定價金六拾錢 送料金六錢

和洋支那に於ける揚物料理の材料と方法とを詳述したる好著にして、之を熟讀せば何れの家庭に於ても美味なる揚物を食膳に上せ得べく、又飽食満腹し得べし。乞ふ速に一讀實行せよ

■服部茂一先生著 □萬戸に適する茶菓製造の秘法は是

版三 ■**茶菓子製造法** 新形洋綴美本 全一冊百八十頁 定價金七拾錢 送料金六錢

美味にして極めて安價、滋養に富みて何人も舌鼓するお茶菓子の簡易製造法を説きたる實用向の良書にして、一般家庭より絶大の好評を以て迎へられつゝあり。敢て主婦の一讀を望む

■文學博士 佐々木信綱先生著 □古今の風格紙上に躍如たり

好評 ■**古今集新釋** 菊判布製函入美本 全一冊凡五百頁 定價金壹圓八拾錢 送料金拾貳錢

和歌を學ぶ者の必ず味讀すべき古今和歌集の新釋にして、これ博士獨特の領域、敢へて他人の模倣追従を許さず、竹柏園下の門人は勿論、國文和歌に志す人の愛讀すべき名著也

■文學博士 久米邦武先生著 □時勢を洞察して活動せよ

好評 ■**時勢と英雄** 新形希製函入美本 全一冊四百八十頁 定價金壹圓貳拾錢 送料金八錢

時勢は英雄はを作り英雄時勢を作るとかや、上下三千歳此の間に崛起したる英雄を捉へて其の時代との關係を論じて完膚なく、眞に痛快を極めて史眼紙背に透るの概あり。一讀を俟つ

■文學博士 坪内逍遙先生譯 ■英國劇壇を震撼せしめたる傑作

好評 ■**脚醒めたる女** 四六判布製美本 全一冊二百五十頁 定價金壹圓 送料金八錢

原名を「最後のド、ムラン家」といひ、英のハンキンの傑作にして、少しも傳統臭味なく藝術趣味溢るゝばかり豊かに、又作中の人物の行動は何れもテキパキとして醒めた行き方也

授教校學範師等高子女良奈
著生先代十八田豐

版三

萬葉集新釋

菊判和製帙入美本
全一冊三百八十頁
定價金貳圓貳拾錢
送料金拾貳錢

版再

土佐日記新釋

菊判和綴美本
全一冊百餘頁
定價金五拾錢
送料金八錢

版再

謠曲新釋

菊判大和綴美本
全一冊三百餘頁
定價金壹圓貳拾錢
送料金八錢

徒然草新釋

近刊

平家物語新釋

續刊

377
93

終